

1. はじめに

1980年6月、テンプル大学日本校が東京に開校した。急速に増えた日本での英語教師の需要に答えるために、大学院レベルの個性的で質の高いTESOL（英語を母国語としない人々に対する英語教授法）のプログラムの将来性に着目したものであった。語学学校など、海外に本部を置く教育機関が日本に分校を設置するといったことはそれまでにもあったことで特に珍しいことではなかった。しかし、AA（準学士号）、BA（学士号）、MA（修士号）といった正式な学位を与える海外（アメリカ合衆国）の大学の日本における分校の設置はテンプル大学が最初のケースであった。テンプル大学は、フィラデルフィア市に本拠を置き、約3万の学生を擁する公立の総合大学である。

以来、100を超える米国の大学が日本校の設置のための調査団を送ってきている。実際、多くの大学が日本での業務を始めている。

新聞等で報道されている情報を総合すると、現在、約40校のアメリカ大学日本校が開校していることになる。「(その中には、) 実際に優れた教育を行っているところもあれば、本当にこれでよいのだろうかと思わざるを得ないところもある」と述べているのはカミングスとチェンバースである。彼らは、IIE（国際教育事業団）からの援助を得て調査研究を行い、「Profiting From Education - Japan - United States International Ventures in the 1980's」という報告書（邦訳『アメリカ大学日本校』アルクcl、1990年）を発表している。その中で、「1970年代までは、アメリカ本校がその運営を管理し、財務を処理するものばかりであって、たとえ問題があったとしても、その影響は、もっぱらアメリカ人だけに限られるものであった。（ところが、1980年代より日本で開校されているアメリカ大学の日本校は、その意味において、）米国という枠をはみ出す新しい形態の海外校である」、と述べている。つまり、「（日本の）パートナーと共同で運営され、新たな（利益を上げることができると）財政的契約が取り交わされる例が多くなってきているし、時には、これらの日本校では、カリキュラムの一部ないし全部が英語以外の言語（日本語）で教えられている場合がある」、とも述べている。

こういった状況について、アメリカの高等教育界から懸念の声が出てきている。カミングスとチェンバースの研究は、こういったアメリカ高等教育界の懸念の声に寄与すべく行われたのである。

この他に、田中による研究がある。田中は、『高等教育研究所紀要』第12号（1990年12月）「国際教育交流の新段階 - 1990年代の高等教育への課題と提言」に収録された「高等教育機関の国際進出問題」と題する論文の中でこれらアメリカ大学日本校の問題を検討している。田中の研究は、十把一絡げに論じられているが教育実態として個々に様々な様相を呈しているアメリカ大学の日本校を日本の高校生にとっての進路選択の対象として規定することを前提として、その教育機能および教育内容を実態に則して分類することを試みたものである。また、田中は、『国際学レビュー』第3号（1991年3月）の中に収録された「米国大学日本校の学生の实態に関する一考察」と題する論文の中で、アメリカ大学日本校の学生インタビュー調査の結果をもとに、我が国の高校生のアメリカ大学日本校の進路選択の実態に触れ、彼らにとっての進路選択の対象としてのアメリカ大学日本校の存在意義について議論している。

これまで、大多数の新聞や雑誌などのマスコミの報道は、日本の受験戦争からこぼれ落ちた若者たちの逃げ場として規定し、更に、アメリカ大学日本校がこういった若者たちに着目して十分に教育機能を果たしていないとか、教育目的以外の目的で行われていると言って非難をしていたし、文部省は、日本の大学設置基準の適用外の任意の高等教育機関と位置づけ、一切のコメントを避けている。

本研究は、アメリカ大学日本校4校に在学する学生に対する質問紙票調査の結果を基に、彼らの社会的アイデンティティの明確化を試みたものである。

2. 調査の概要

調査対象：1991年2月1日現在、アメリカ大学日本校に在学する学生

調査対象校：1. テンプル大学日本校

2. サザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校

3. ミネソタ州立大学機構秋田校

4. 東京アメリカン・コミュニティ・カレッジ

調査期間：1991年2月1日～3月31日

調査方法：機関依頼による調査（原則として、全員配付任意返送）

サンプル数：期間内に回収された有効回答711人

内訳 集中英語課程243人（男性168人、女性 75人）

学部課程 468人（男性197人、女性 271人）

* テンプル大学日本校のデータは、学部学生のみ。

ミネソタ州立大学機構秋田校の場合には、集中英語課程の学生のデータのみ。

（備考） グラフ上では、テンプル大学日本校がテンプル、サザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校が南イリノイ、ミネソタ州立大学機構秋田校がミネソタ、東京アメリカン・コミュニティ・カレッジが東京アメリカンとそれぞれ表記されている。

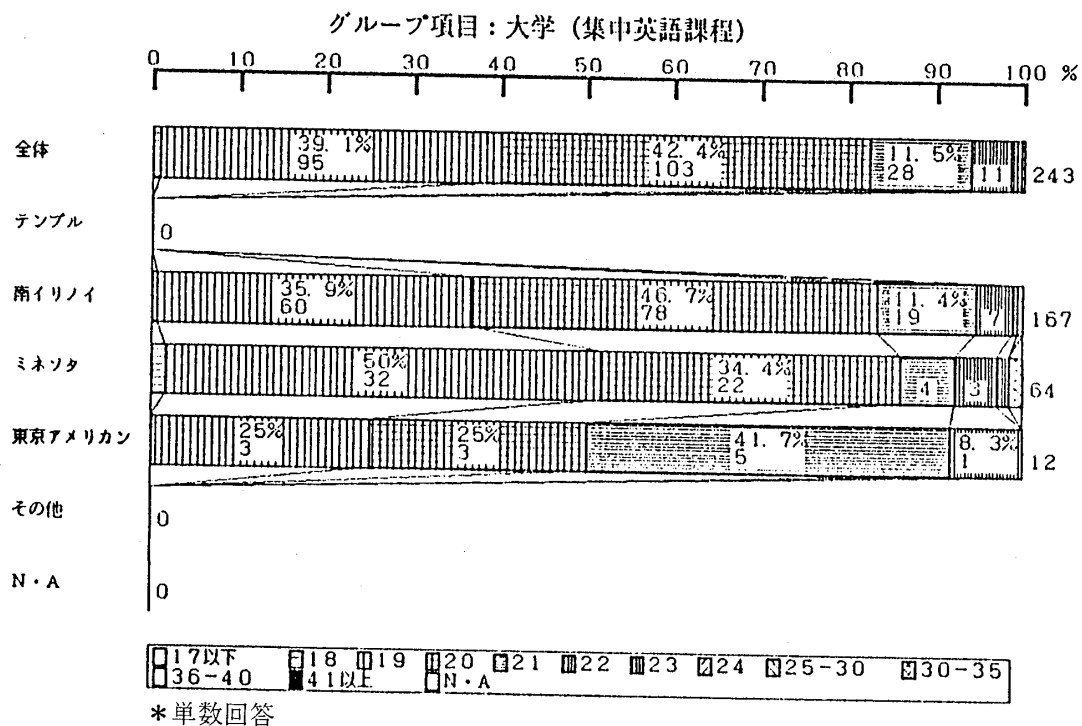
3. 調査結果およびその分析

3-1. 集中英語課程の学生（サザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校、ミネソタ州立大学機構秋田校、東京アメリカン・コミュニティ・カレッジ—計243サンプル）の場合：

19、20歳の学生が全体の8割を占める。

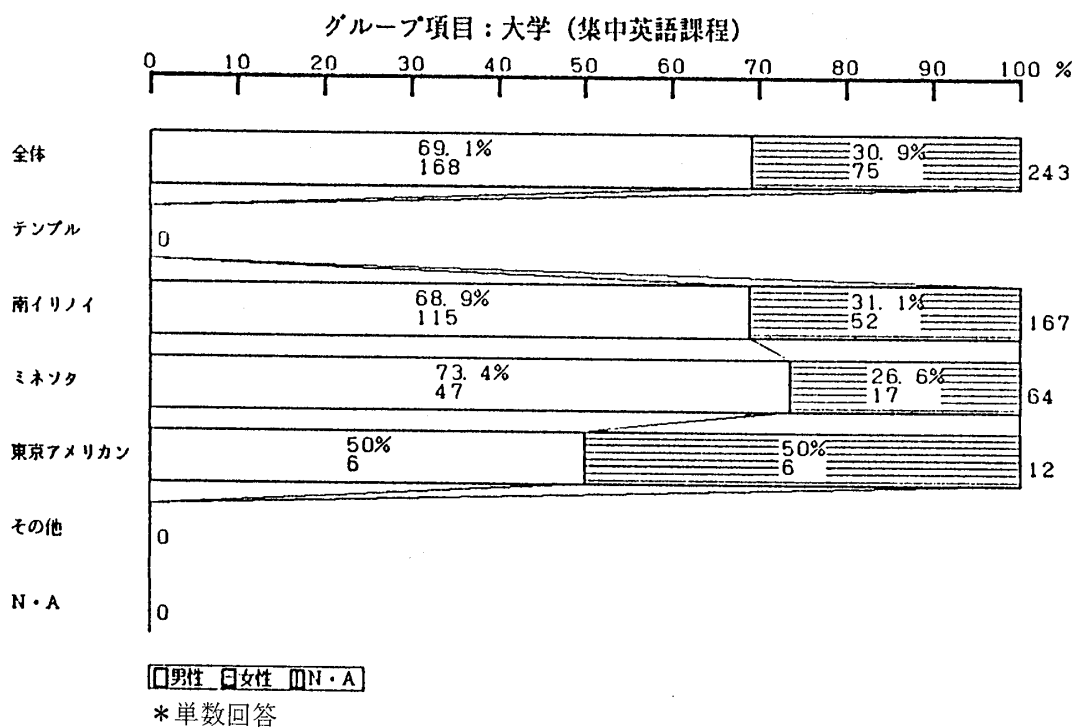
23歳以上は僅かに1.6%である。

集中英語課程の学生243人中19、20歳の学生が198人（81.5%）であり、21、22歳の学生39人を加えると237人（97.5%）となり、圧倒的に19～22歳の大学年齢層の学生が多い。23歳以上はずかに1.6%である。彼ら就学形態は、フル・タイムである。



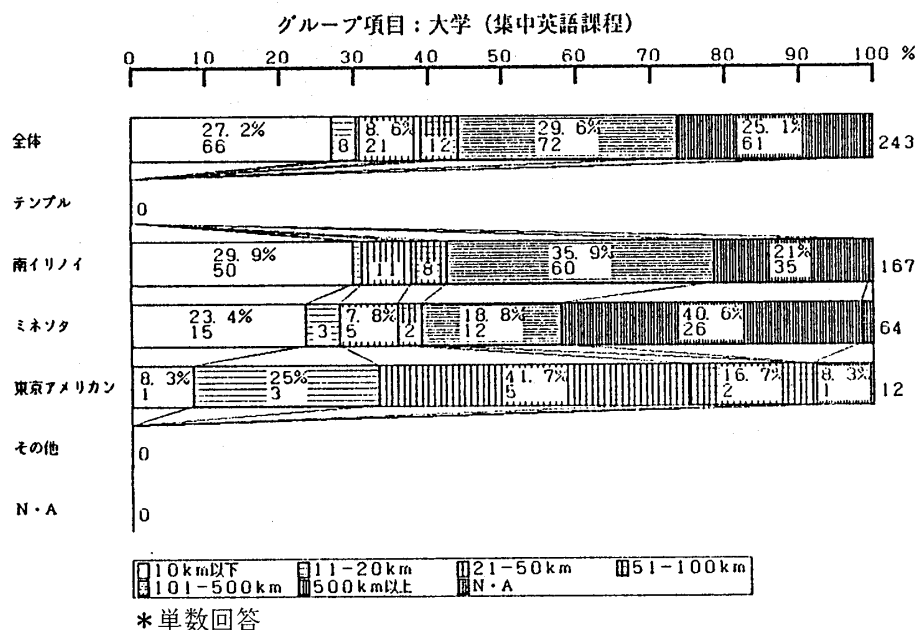
男女比率は、7 対 3 で男が多い。

243人中男168人（69.1%）、女75人（30.9%）で男が多い。



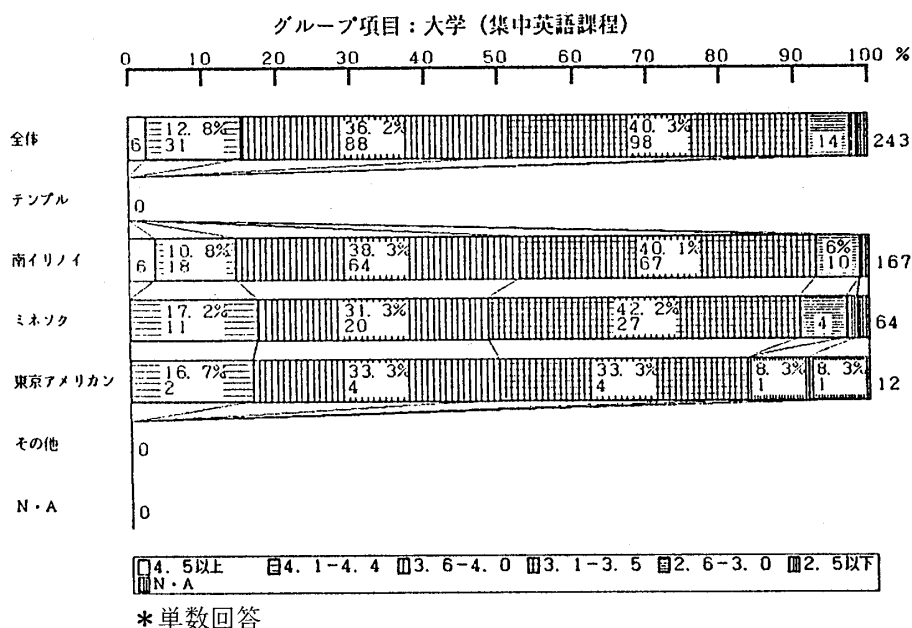
243人中133人 (54.6%) が寮、下宿もしくはアパート生活をしている。

サザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校、ミネソタ州立大学機構秋田校などにおいて顕著であり、前者で167人中95人 (56.9%) が県外出身者である。後者の場合は、64人中38人 (59.4%) が県外出身者となっている。両校とも自治体誘致によって設立された地方大学である。東京に設立された東京アメリカン・コミュニティ・カレッジが統計に含まれているものの、サンプル構成比が全体の4.9%を極めて小さいために、結果として、地方に設立されたアメリカ大学日本校の学生生活の実態を概観する結果となっている。



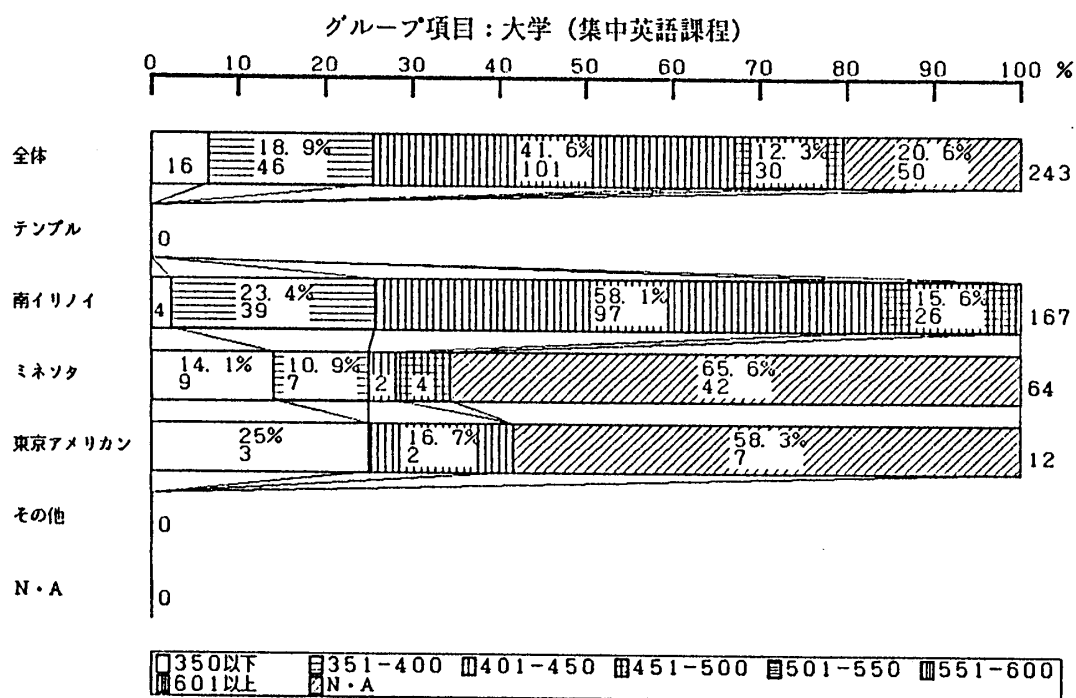
高校時代の成績平均値は 5 段階中 3 (3.1~4.0) が243人中186人 (76.5%) である。

高校時代の成績平均値について尋ねたところ、3.1~3.5が98人 (40.3%)、3.6~4.0が88人 (36.2%) で5段階中3平均が全体の約8割を占めている。ちなみに、4.0以上は37人 (15.3%) である。



最近のTOEFLの得点は？ 約7割が450点以下である。

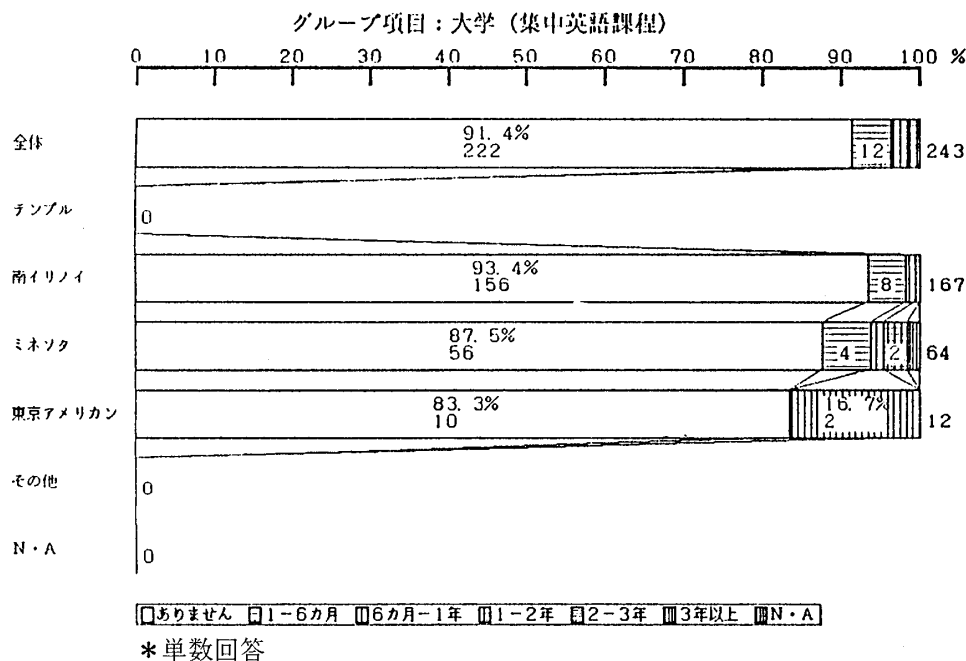
最近のTOEFLの得点について尋ねたところ、401～450が101人（41.6%）、351～400が46人（18.9%）、350以下が16人（6.6%）で全体の約7割を占め、451以上は僅かに30人（12.3%）であった。これらの3校の場合、学部課程に直接入学してくる学生（TOEFL 500点以上）はいない。レベルには個人差があるものの、全学生が集中英語課程からの入学である。サザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校の場合、同課程の1～2年生を含んでおり、設立間もないミネソタ州立大学機構秋田校および東京アメリカン・コミュニティ・カレッジの場合には、同課程の1年生のサンプルからの調査結果である。学習効果の差が統計結果に3校間格差として現れている。



*単数回答

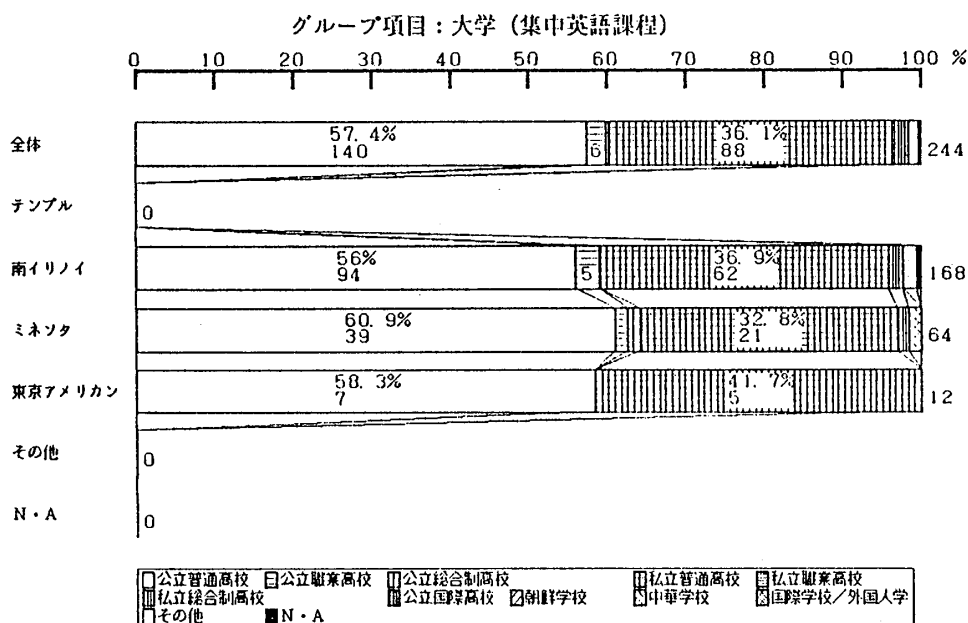
9 割が海外学校経験なし。

海外での学校経験の有無に関しては、全体の 9 割（243人中222人、91.4%）が「なし」と回答している。学校経験者も若干いるが、多くが短期（1 年未満）の高校留学経験である。また、長期（2 年以上）の経験者も極めて少数であるが、幼稚園、小学校、中学校における経験者である。



普通高校出身者が全体の 9 割を占めている。

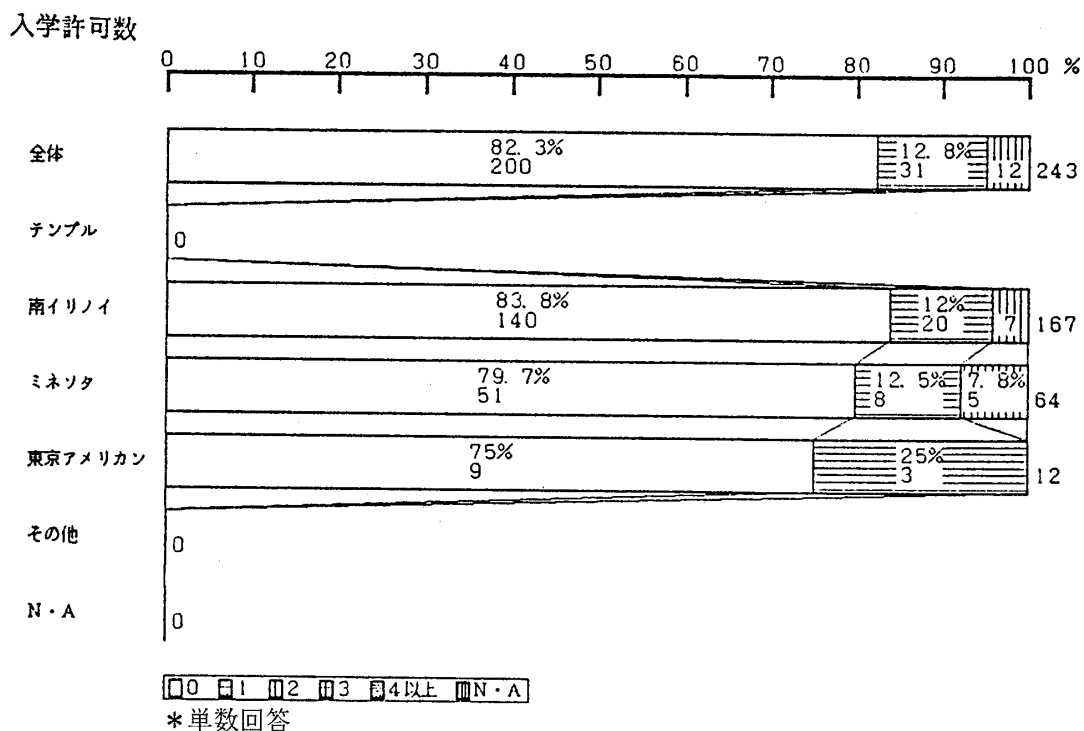
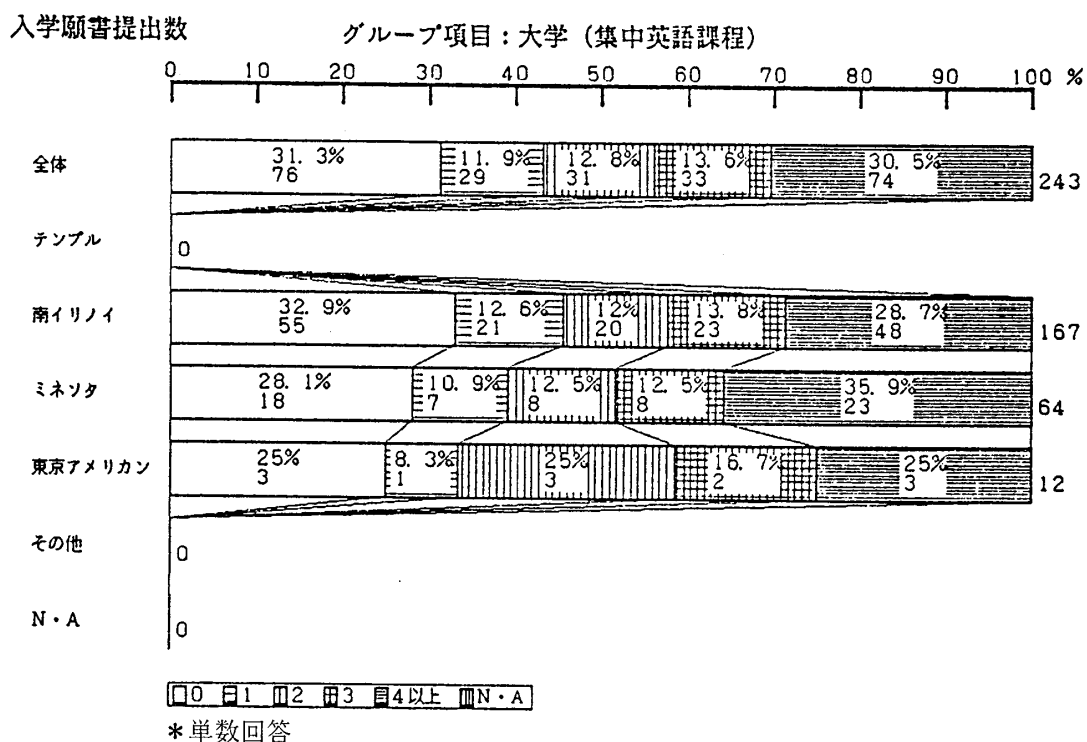
出身高校について尋ねたところ、全体の93.8%（228人）が普通高校（公立56%、私立38.7%）出身である。



* 単数回答。よって全体数が 243 でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

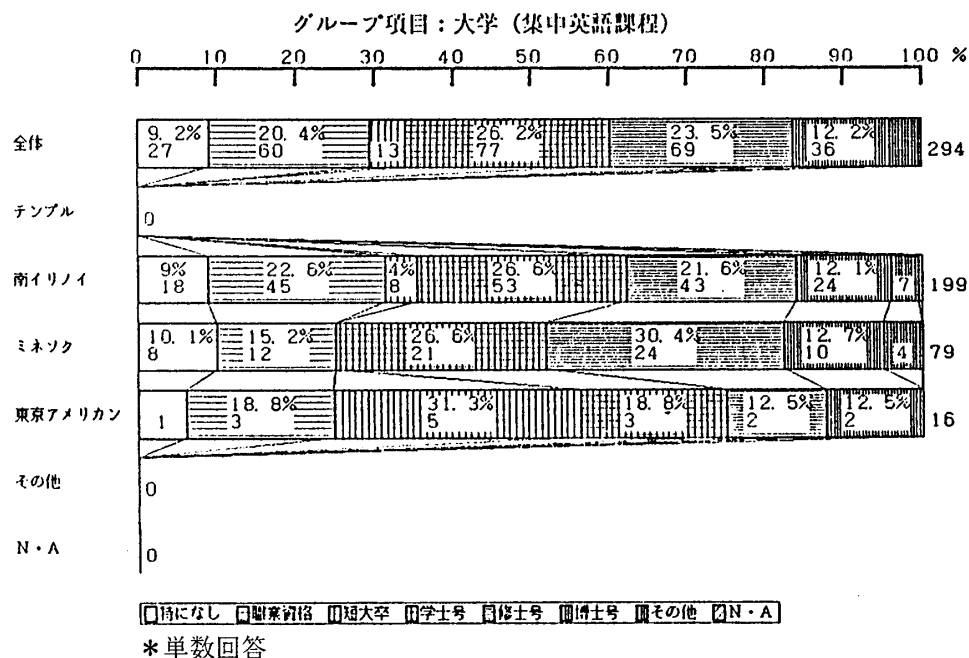
243人中167人（68.7%）が日本の大学の少なくとも1校以上に入学願書を提出している。74人（44.3%）が4校以上に入学願書を提出。そのうち、43人（26.7%）が少なくとも1校から入学許可を得ている。

日本の大学への出願状況について尋ねたところ、167人（68.7%）が日本の大学の少なくとも1校以上に、そのうち、4校以上に回答した学生のが74人（44.3%）いる。入学許可の有無については、43人（26.7%）が少なくとも1校から入学許可を得たと回答している。



将来、得たい学歴・資格は？ 学士号77人（31.7%）、修士号69人（28.4%）、職業資格60人（11.1%）、博士号36人（14.8%）の順となっている。

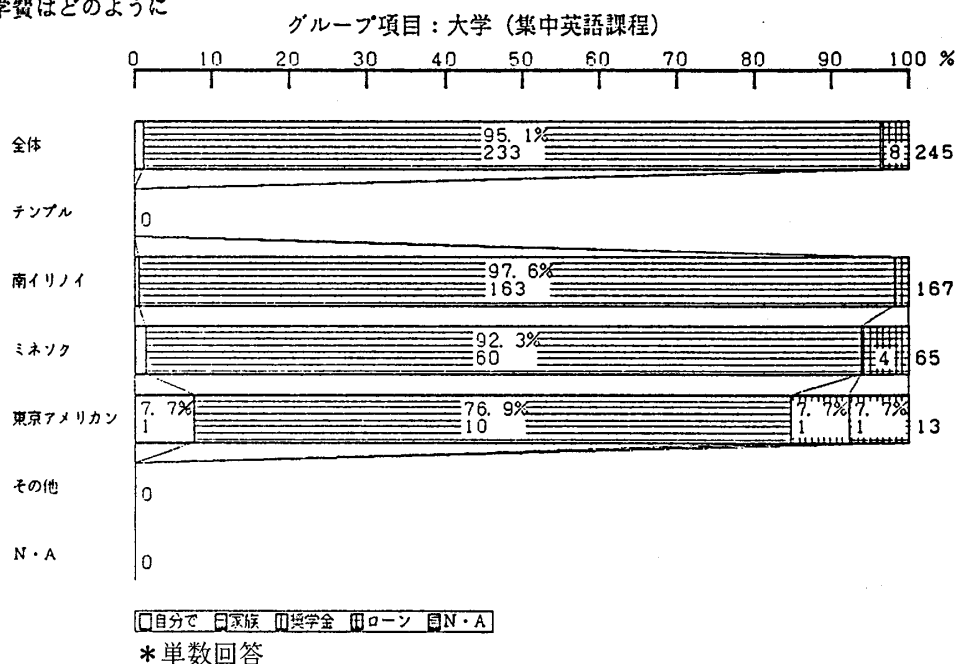
将来、得たい学歴・資格について尋ねたところ、全体243人中、学士号77人（31.7%）、修士号69人（28.4%）、職業資格60人（11.1%）、博士号36人（14.8%）の順になっており、高学歴指向が顕著である。



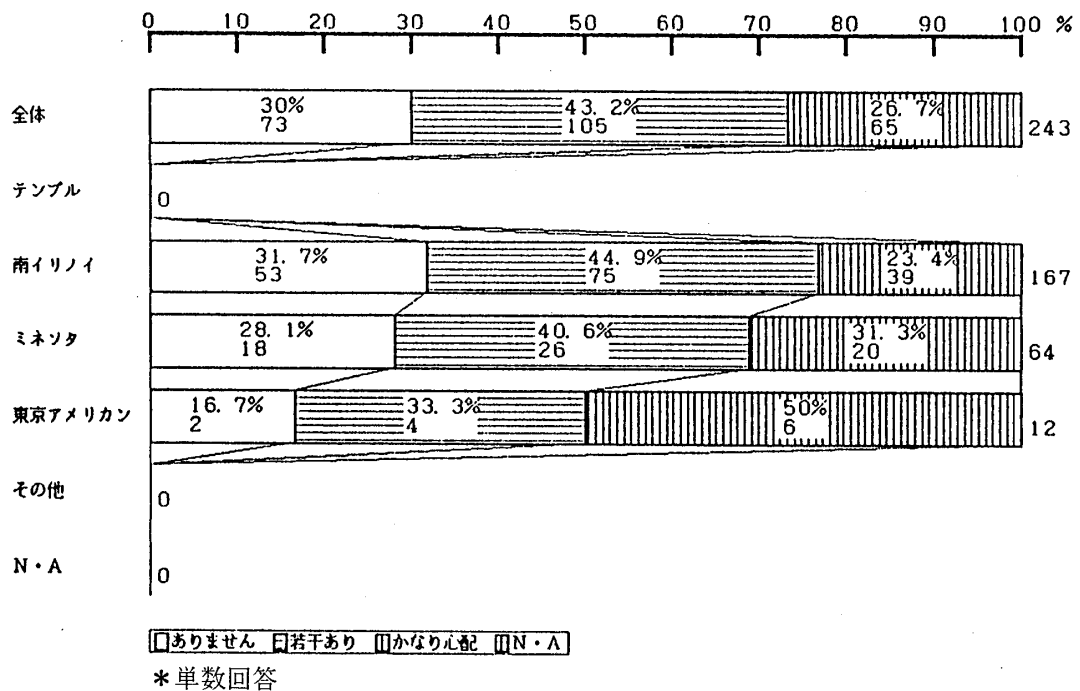
学費は家族が全面的に援助が9割以上。しかし、7割が継続的な援助に不安。

学費の納入について、243人中233人（95.9%）が家族の援助で圧倒的多数をしめている。しかし、将来（本校での学生生活を含む）継続的な援助には170人（69.9%）が何らかの不安を感じていると回答している。

学費はどのように



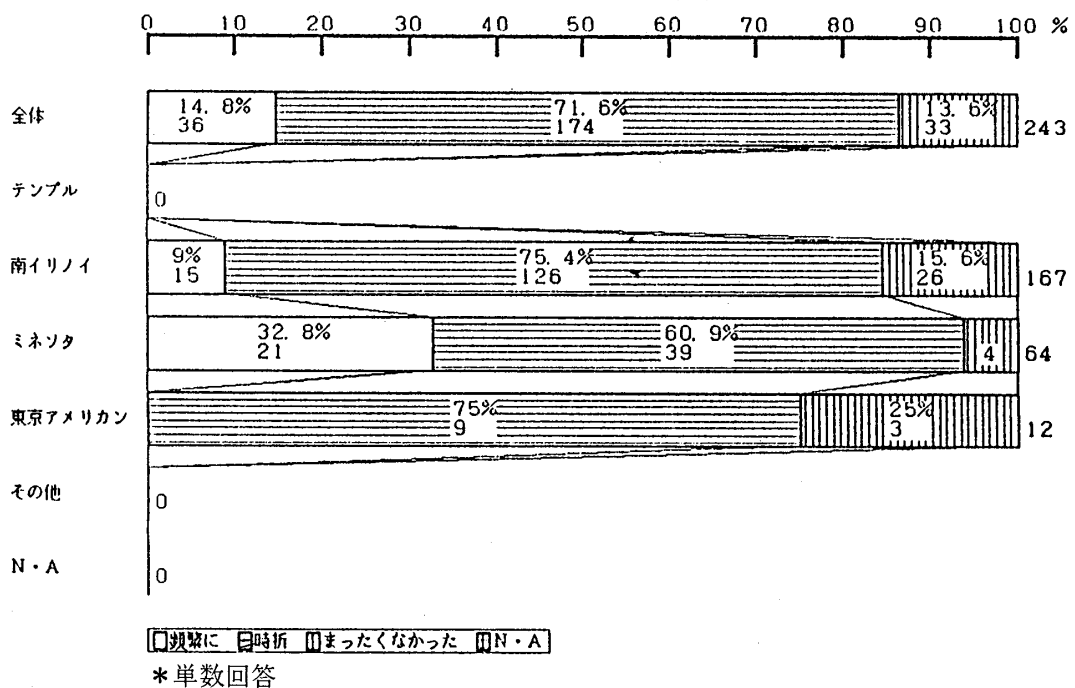
授業料の継続的支払の不安



授業終了後に英語を話しますか？ 時折71.6%，頻繁に14.8%、まったくない13.6%。

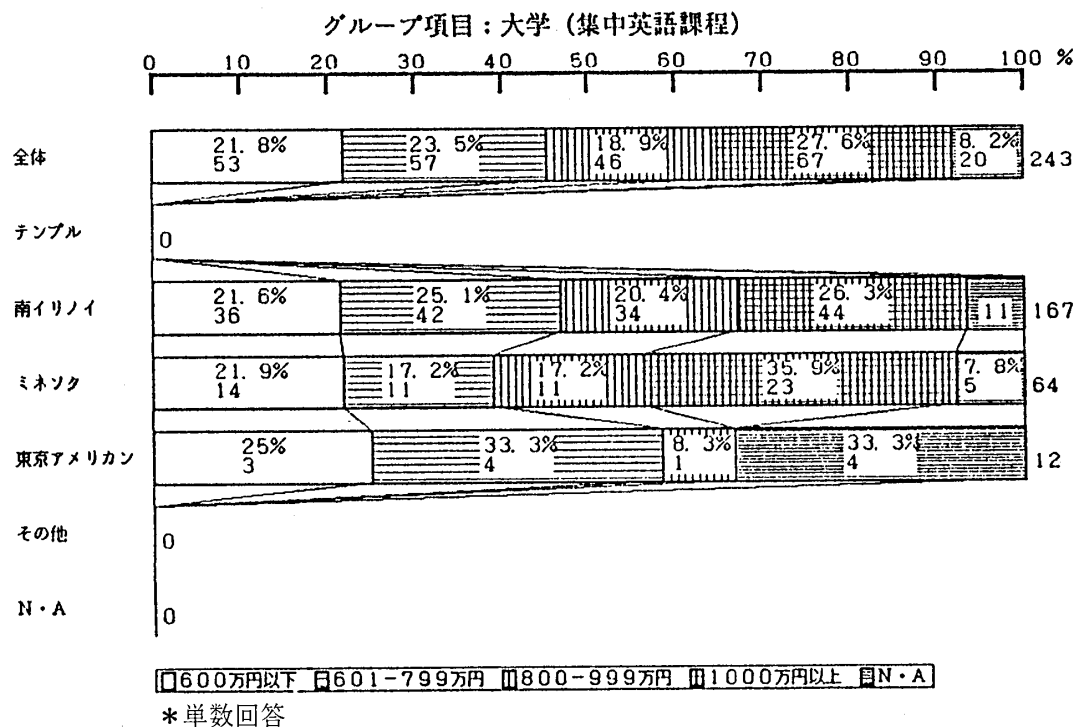
従業終了後の英語での生活について尋ねたところ、243人中174人（71.6%）が「時折」、36人（14.8%）が「頻繁に」、33人（13.6%）が「まったくない」と回答している。

グループ項目：大学（集中英語課程）



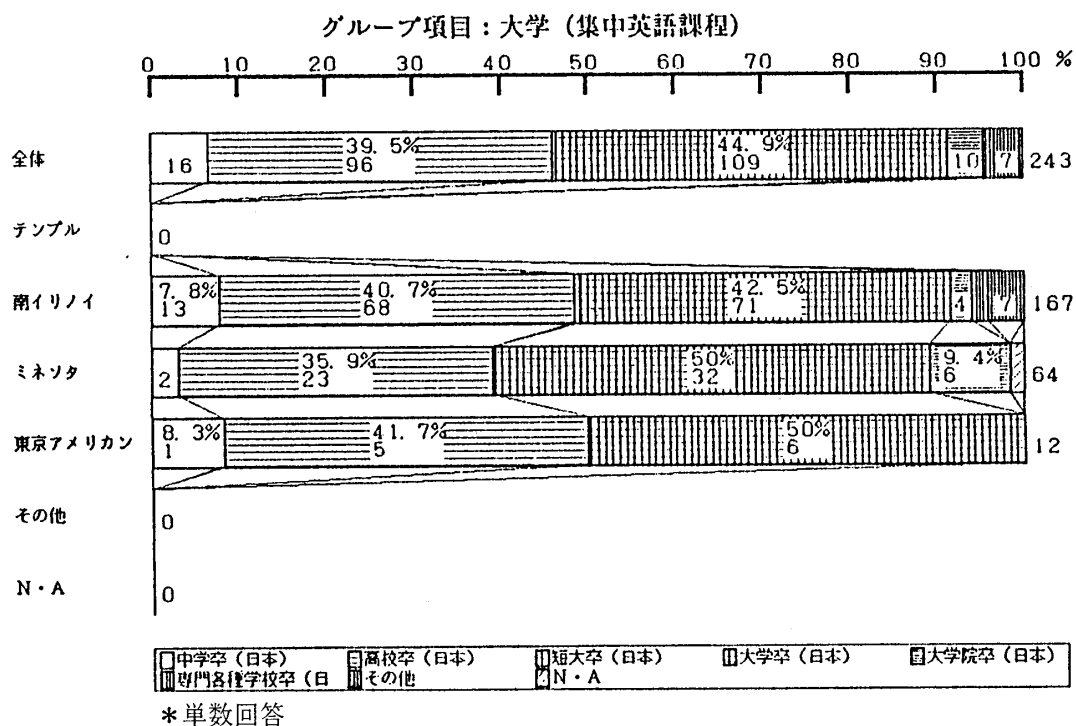
家庭の年収は？ 1000万円以上27.6%、800～999万円18.9%で、約5割が800万円以上。

家庭の年収について尋ねたところ、1000万円以上が243人中67人（27.6%）、800～999万円が46人（18.9%）、601～799万円57人（23.5%）、600万円以下53人（21.8%）となっている。



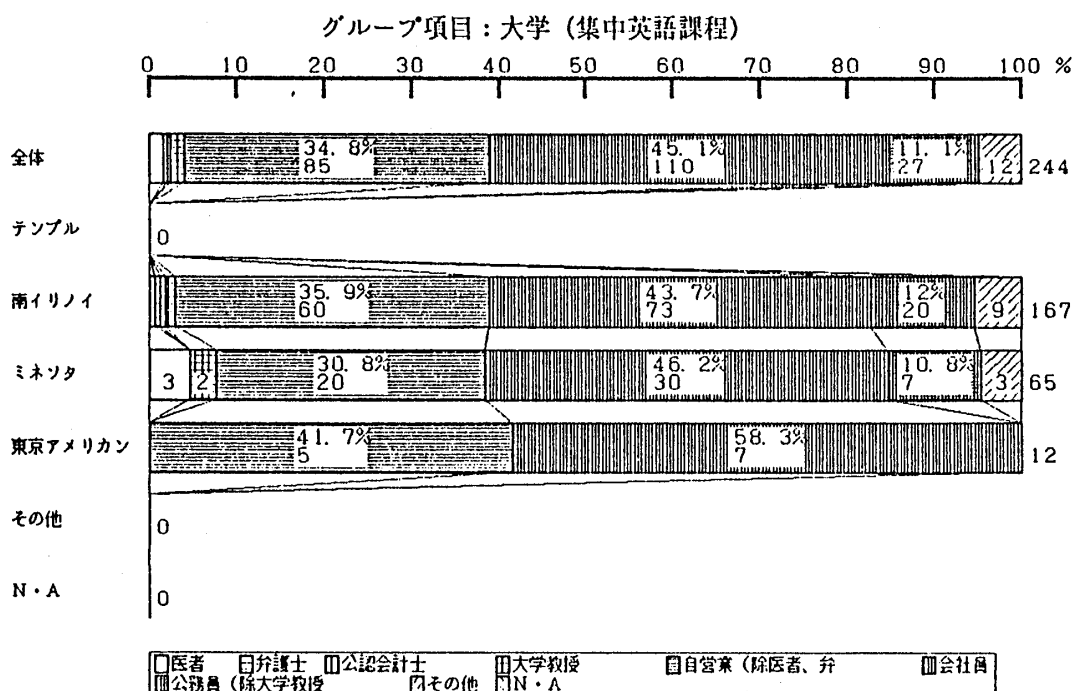
父親の学歴は？ 大卒44.9%、高卒39.5%。

父親の学歴について尋ねたところ、243人大卒109人（44.9%）、高卒96人（39.5%）、中卒16人（6.6%）、大学院卒10人（4.1%）との順となっている。



父親の職業は、会社員45.3%、自営業35.0%。

父親の職業について尋ねたところ、243人中会社員110人（45.3%）、自営業85人（35.0%）の順となっている。

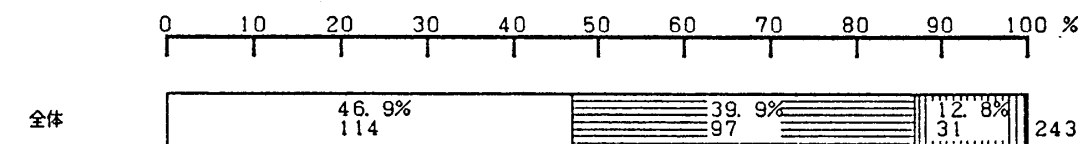


*単数回答。よって全体数が 243 でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

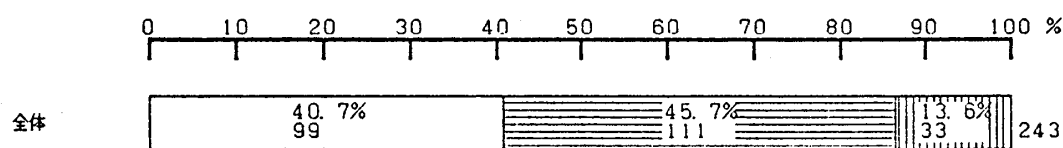
彼らの両親評は？ 知的好奇心が旺盛で教育熱心で、国際政治・経済にも関心が深く、かつ子どもの将来の職業にも関心を抱いているが、必ずしも日本の大学に大きな不満があったり、アメリカの大学教育をよく知っているわけではない。

彼らの両親像について尋ねたところ、知的好奇心が旺盛、教育熱心、国際政治・経済への関心、子どもの将来の職業への強い関心といったところに約8割が賛意を示している。一方、日本の大学教育への強い不満とか、アメリカ大学の教育に対する深い理解、となると必ずしもそのようではないと回答している。

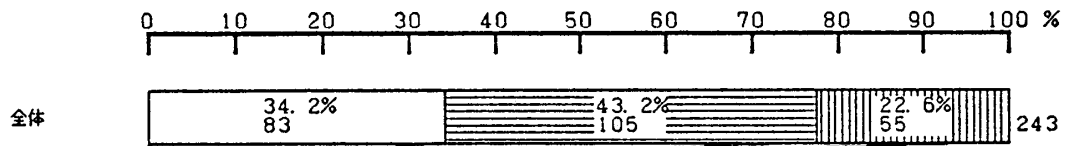
両親は：知的好奇心旺盛 グループ項目：大学（集中英語課程）



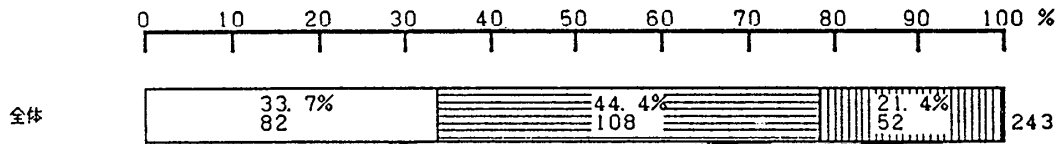
両親は：教育熱心



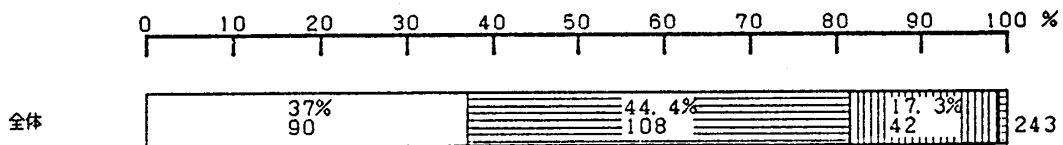
両親は：国際経済に強い関心



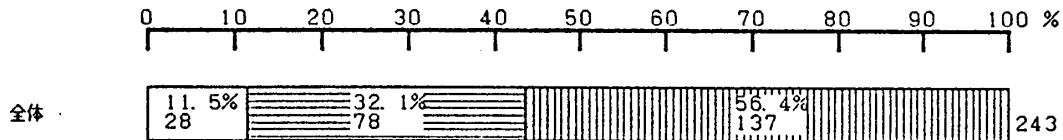
両親は：国際政治に強い関心



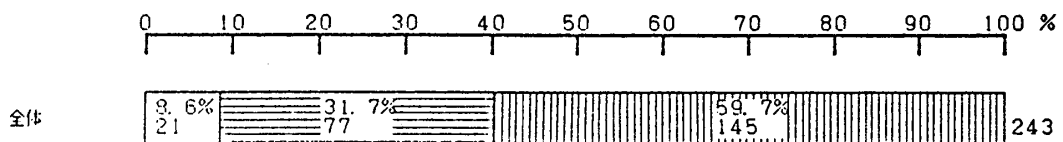
両親は：子どもの将来の職業



両親は：日本の大学教育に不



両親は：米国の大学教育をよ



□非常にそう思う ▨そう思う ▤そうは思わない

*単数回答

進学理由でもっとも顕著なものは、英語の習得(95.1%)、教養を深めるため(91.3%)、興味関心のある事象についていっそうよく知るため(90.6%)となっている。

進学理由を尋ねたところ、英語の習得が243人中231人(95.1%)、教養を深めるため222人(91.3%)、興味関心のある事象についていっそうよく知るため220人(90.6%)といった項目が極めて高い賛意値を示している。一方、よりよい職業に就くためとか、より多くの収入を得るためとかは、60~70%の賛意値を示しているものの案外低い値となっている。

その他、

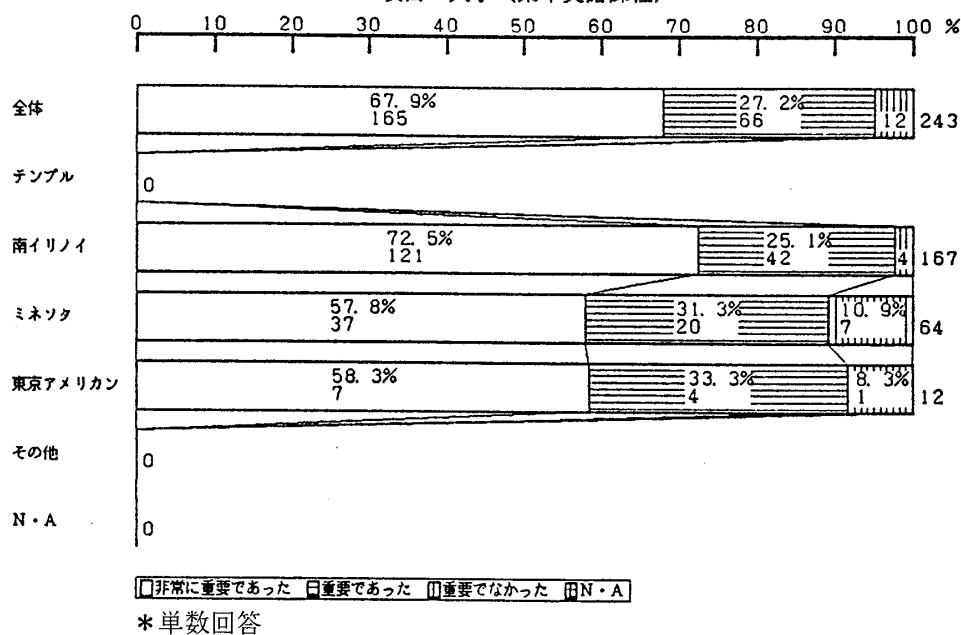
1. 直接留学への不安(78.6%)
2. 海外で仕事がしたい(72.8%)
3. 英語教育プログラムの質(70.04%)
4. アメリカ大学生生活への憧れ(70.3%)
5. 他大学にない特別教育プログラム(66.7%)
6. とにかくアメリカに行きたかった(66.3%)
7. 希望の職に就職が有利(63.4%)
8. 本校のすばらしい教育の評判(57.6%)
9. すばらしい教育の評判(51.0%)
10. 浪人を避ける(46.5%)

11. 当大学の使命に感動 (39.5%)
12. 両親の薦め (39.1%)
13. 立地条件 (33.0%)
14. 授業料が安い (18.9%)
15. 自宅からの通学圏内 (14.0%)
16. 高校教員の薦め (11.5%)

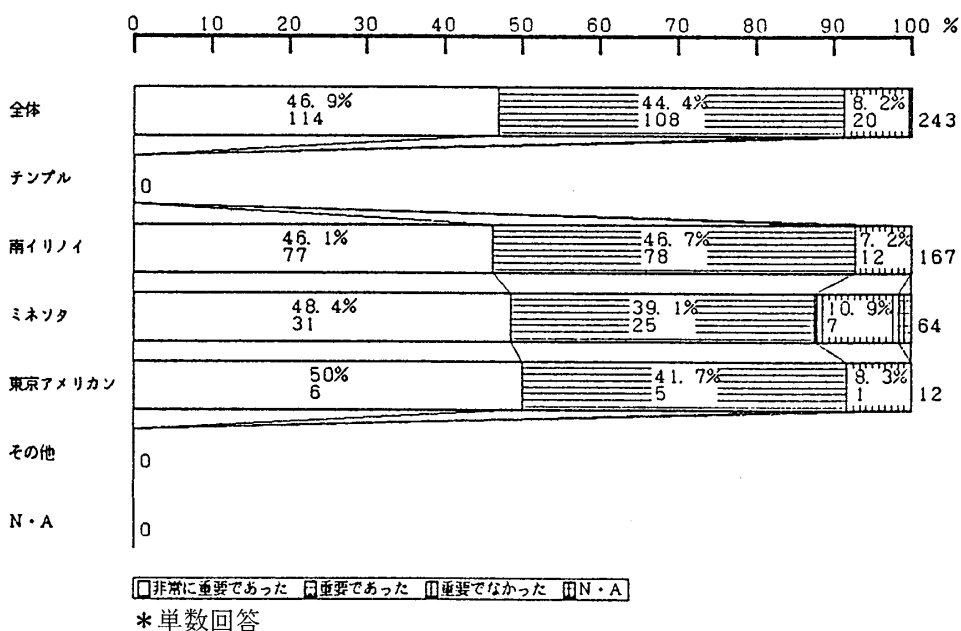
となっている。

進学理由：英語の習得

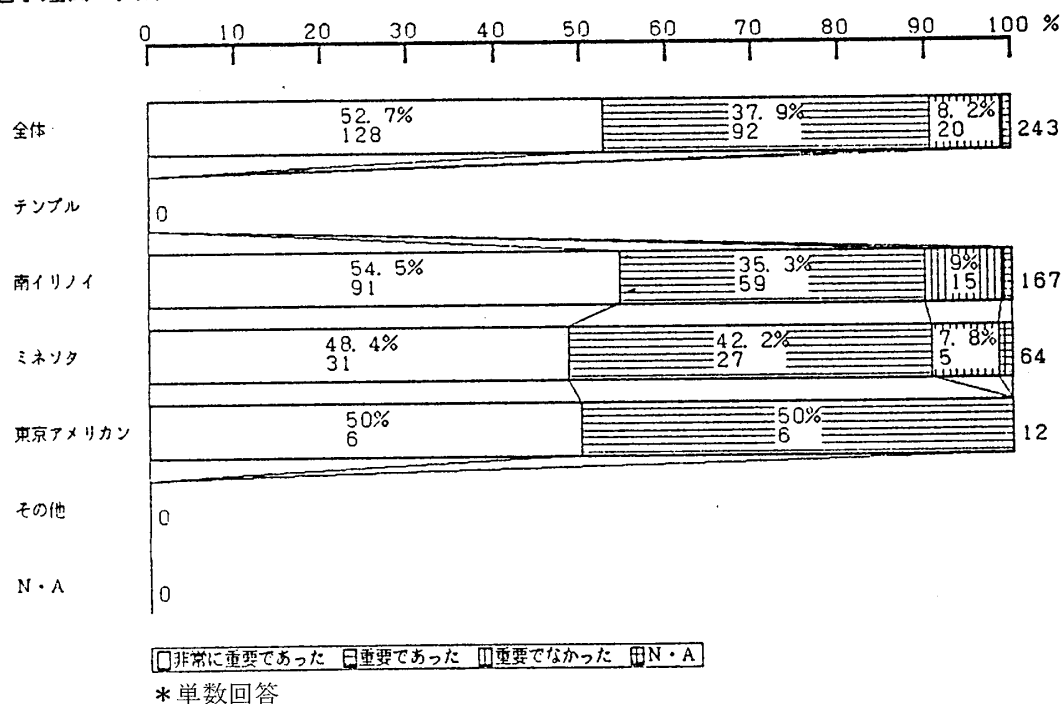
グループ項目：大学（集中英語課程）



進学理由：教養を深めるため



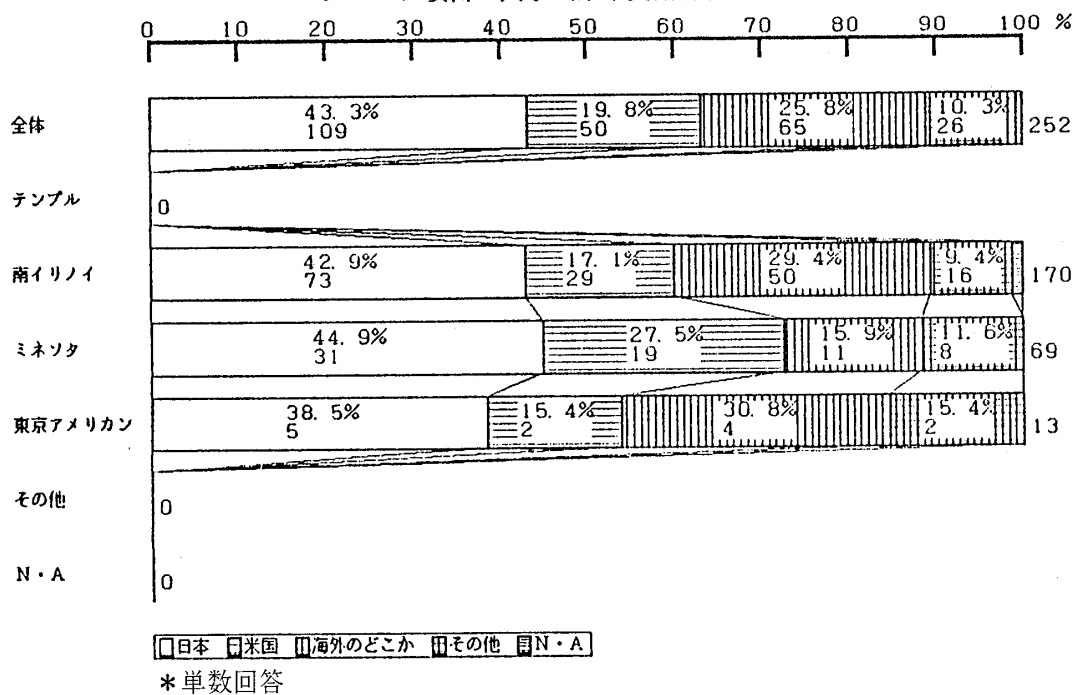
進学理由：興味のあること



将来、海外で仕事をしたい学生は約半数である。

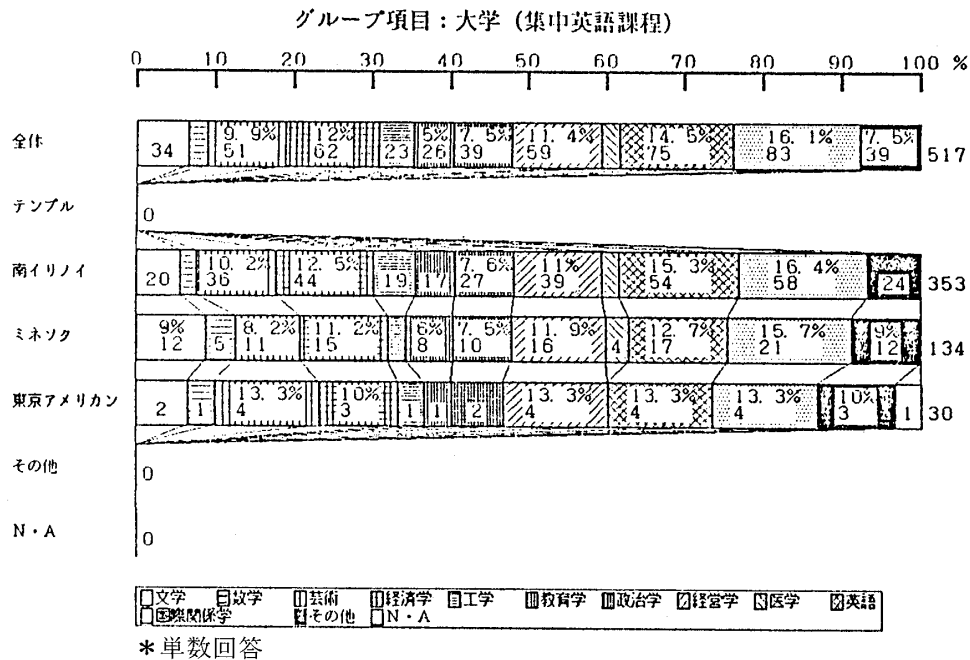
将来、どこで働きたいかという質問に対し、243人中115人（47.8%）がアメリカを含む海外で、105人（44.9%）が日本だと回答している。

グループ項目：大学（集中英語課程）



学問分野への関心？ 国際関係学(34.2%)、英語 (30.9%)、経済学 (25.5%)、経営学 (24.3%)、芸術 (21.0%) の順となっている。

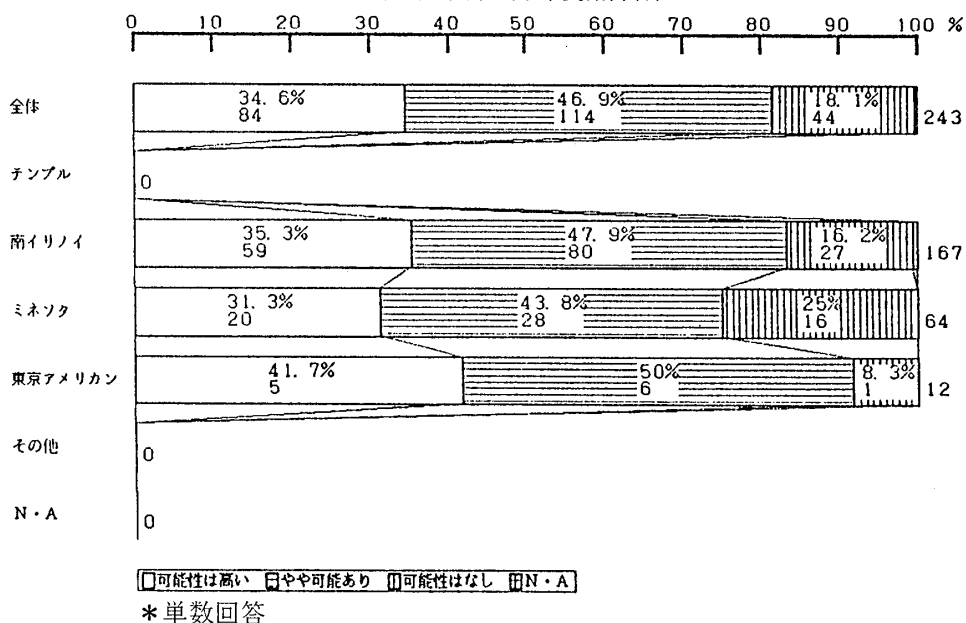
学問分野への興味関心について、国際関係学が243人中83人 (34.2%) と高い人気を示している。また、経済学・経営学もともにビジネスへの興味関心と判断すれば、96人 (39.5%) と国際関係学を上回る。その他、英語75人 (30.9%)、芸術51人 (21.0%) となっている。



約8割の学生がこの学期中に1科目以上の単位を落としそうだと回答している。

この学期の学習状況を尋ねたところ、243人中197人 (81.4%) の学生が1科目以上の単位を落としそうだと回答している。

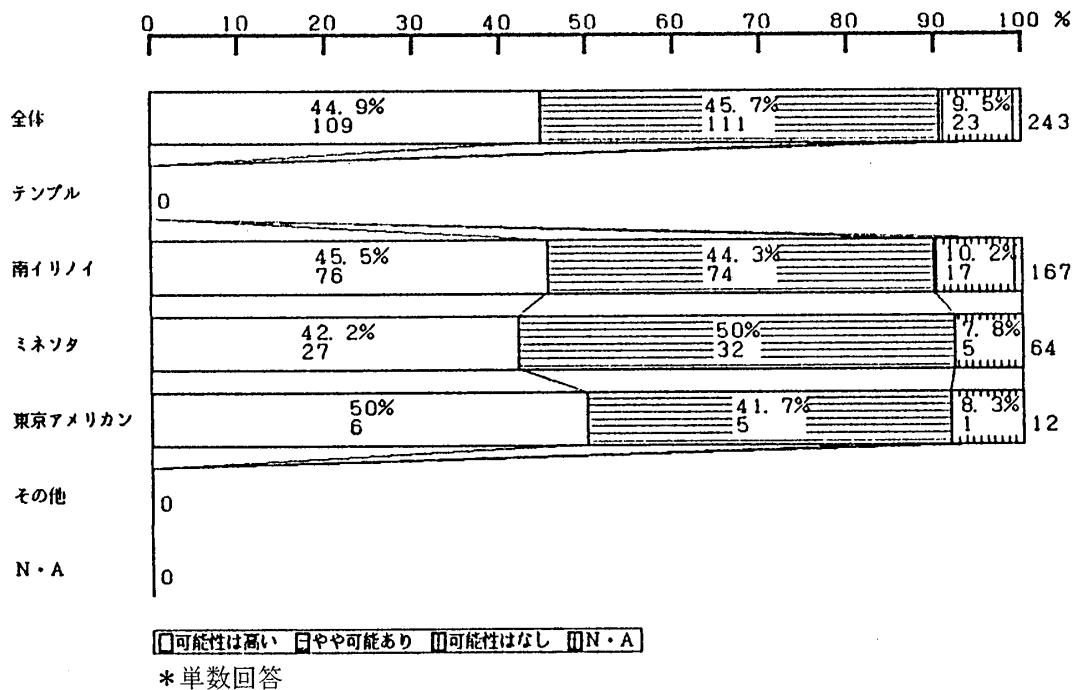
予測：一科目以上単位を落とす グループ項目：大学（集中英語課程）



卒業が予定より延びそうだという学生が約9割。

卒業予定について尋ねたところ243人中220人（90.6％）の学生が予定を延びそうであると回答している。

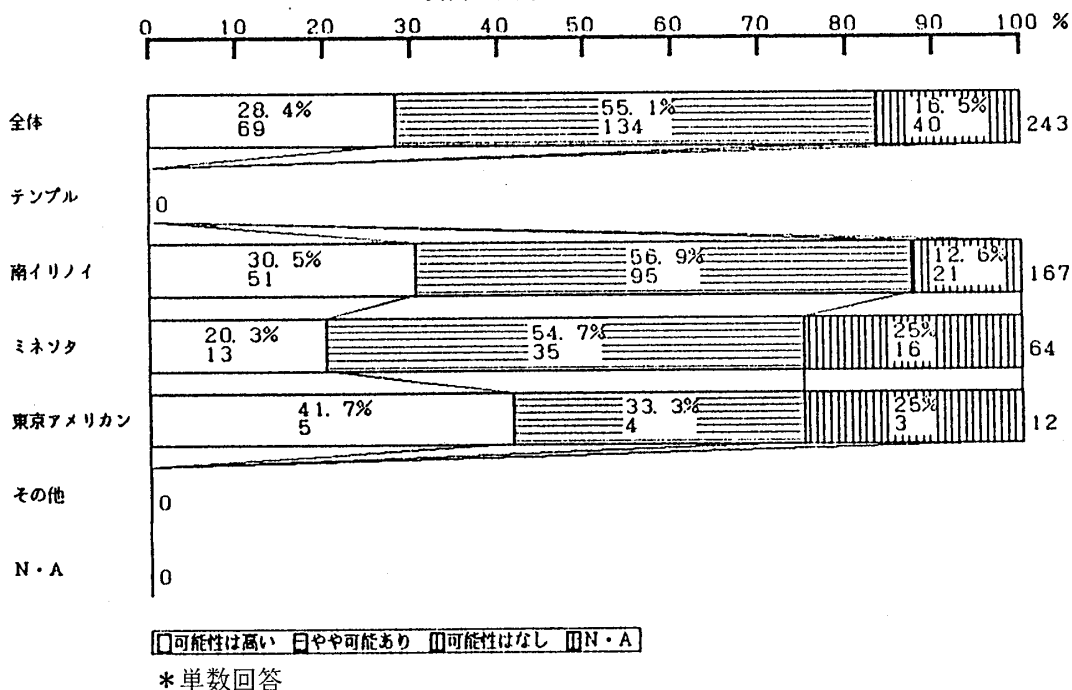
予測：卒業が予定が伸びる グループ項目：大学（集中英語課程）



8割以上の学生が今後TUTORを必要にするかもしれないと回答している。

TUTORの必要性について尋ねたところ、243人中203人（83.5％）がTUTORを必要とする可能性があるとは回答している。

予測：tutorが必要 グループ項目：大学（集中英語課程）

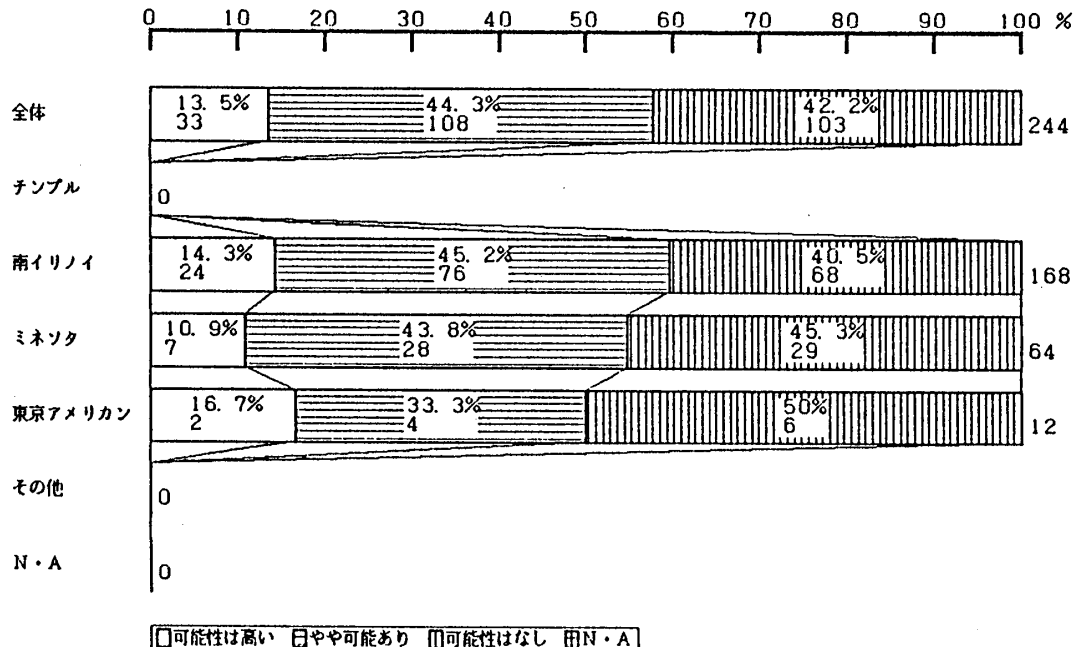


約半数の学生が落第し、中退する可能性のあることを示唆している。

落第、中退の可能性を尋ねたところ、243人中141人（58.0%）がその可能性があるとは回答している。

予測：落第し、中退する

グループ項目：大学（集中英語課程）



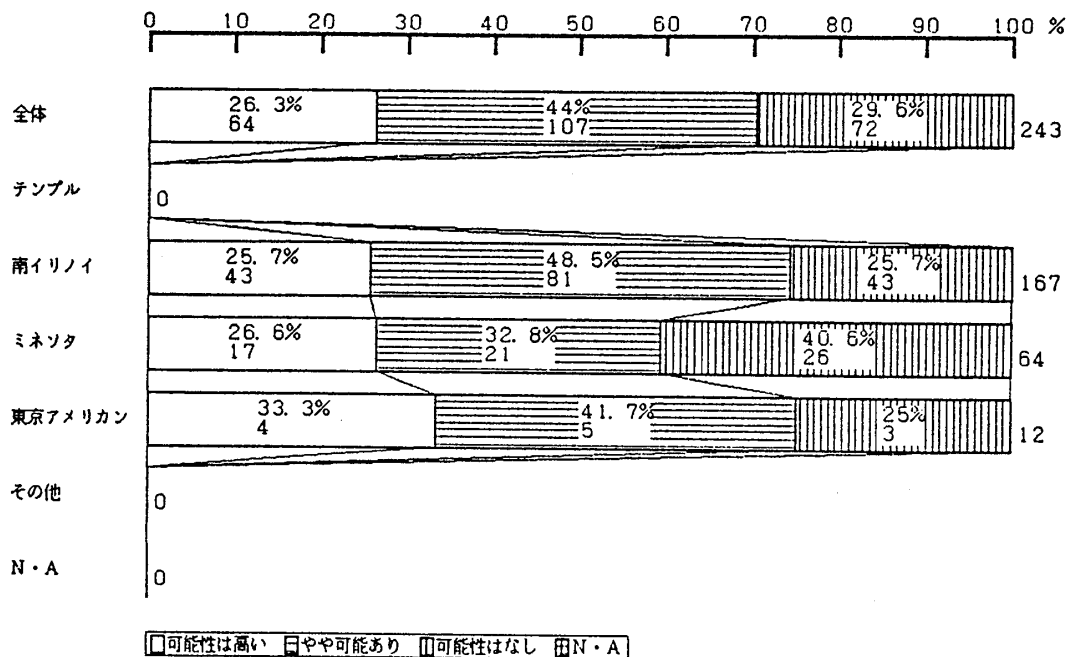
*単数回答。よって全体数が243でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

他のアメリカ大学への編入の可能性をほのめかしている学生が約7割。

他のアメリカへの編入の可能性を243人中171人（70.3%）がほのめかしている。ちなみに、日本の大学への編入については、188人（77.4%）がその可能性はないと回答している。

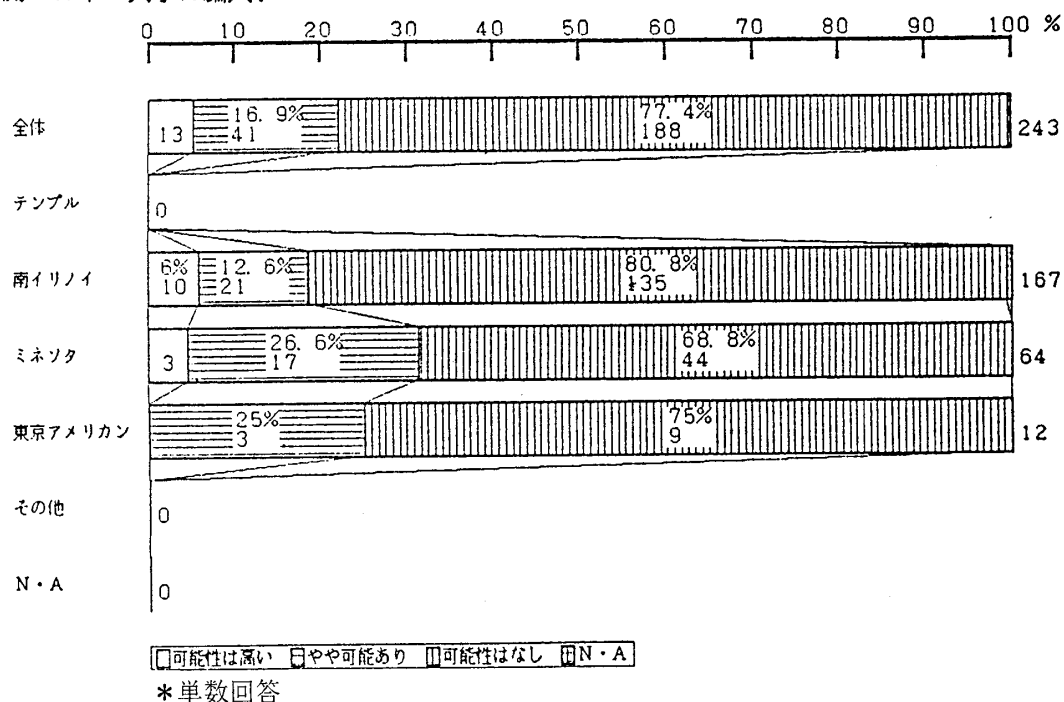
予測：他の米国大学に編入す

グループ項目：大学（集中英語課程）



*単数回答

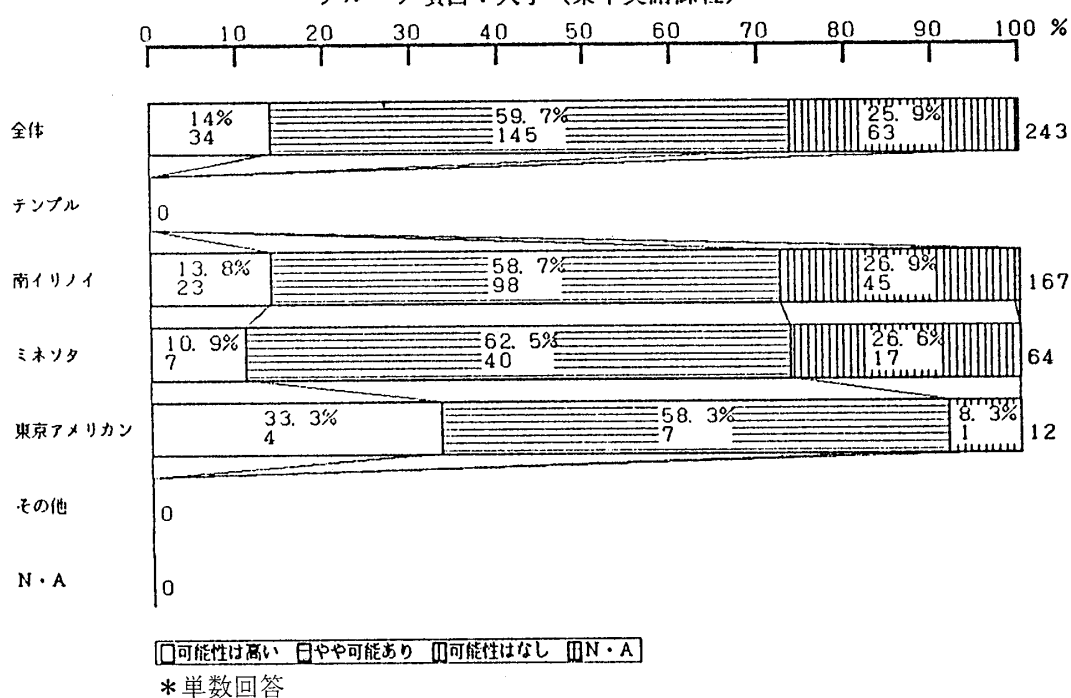
予測：日本の大学に編入、



最終的にこの大学生活に満足していないと思うという学生が約2.5割。

学生生活終了後の結果としての満足度について尋ねたところ、「満足しないだろう」と回答した学生が1 / 4 の63人 (25.9%) いる。「満足しない可能性がややある」と回答した学生が145人 (59.7%)、「満足する」と回答した学生が34人 (14.0%) となっている。

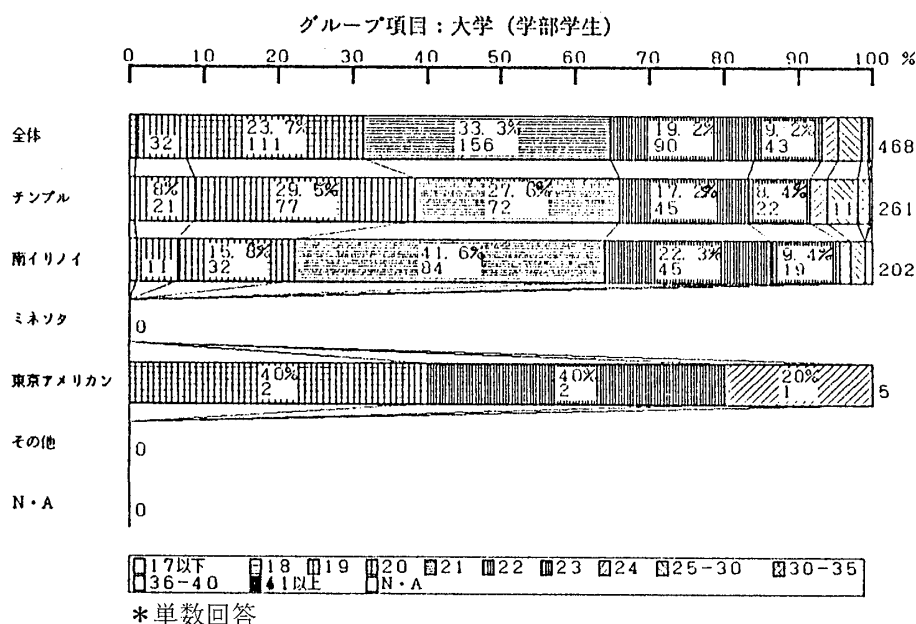
予測：学生生活に満足する グループ項目：大学（集中英語課程）



3-2. 学部課程の学生（テンプル大学日本校、サザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校、東京アメリカン・コミュニティ・カレッジ計468サンプル、内東京アメリカン・コミュニティ・カレッジのサンプル構成比は1.1%で極めて低く、全体として、前出の2校の学生プロフィールとなっている）の場合：

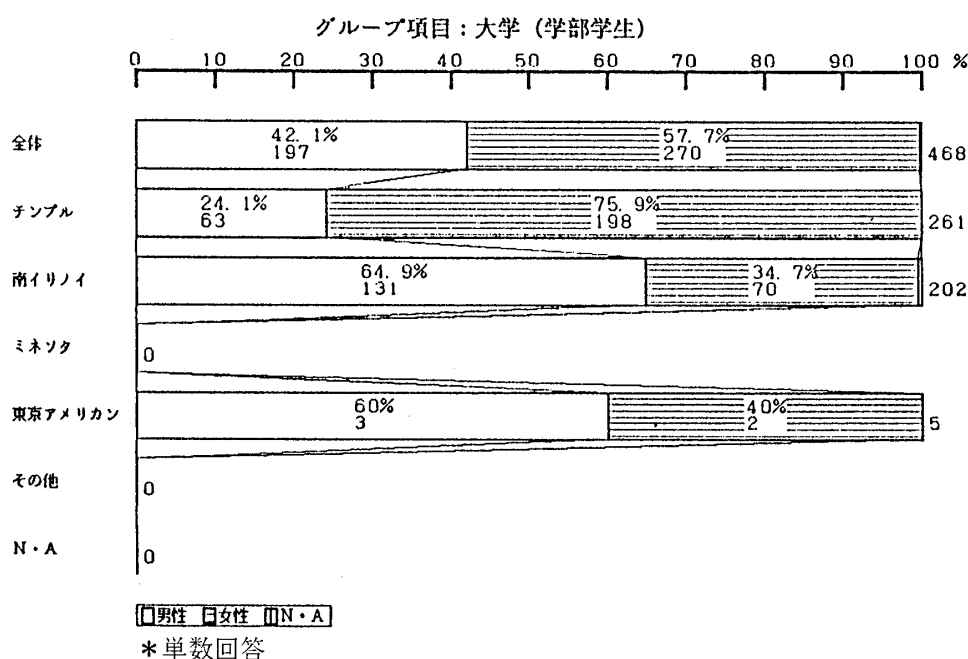
20、21、22歳の学生が全体の約8割を占める。

学部課程の学生468人中20、21、22歳の学生が357人（76.2%）であり、19歳の学生32人、23歳の学生43人を加えると432人（92.3%）となり、圧倒的に19～23歳の大学年齢層の学生が多い。彼ら就学形態は、フル・タイムとなっている。



男女比率は、4対6で女が多い。

468人中男197人（42.1%）、女270人（57.7%）で女が多い。

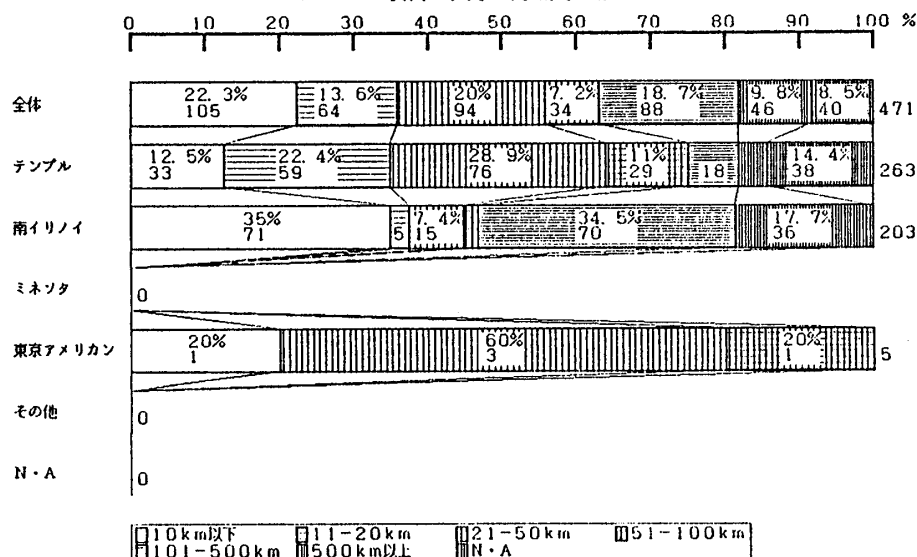


468人中134人（28.6%）が寮，下宿もしくはアパート生活をしている。

サザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校において顕著であるが、同校で202人中106人（52.5%）が県外出身者である。テンプル大学日本校が東京という立地条件の影響と思われるが自宅通学生が、261人中210人（80.8%）となっている。ストリート・キャンパスながら東京副都心（新宿区）という立地条件にあるテンプル大学日本校のサンプルが入ってきたことによって、首都圏からの自宅通学生比率が増加し、相対的に寮、下宿、アパート生活の学生比率が定価している。

大学と自宅の距離

グループ項目：大学（学部学生）

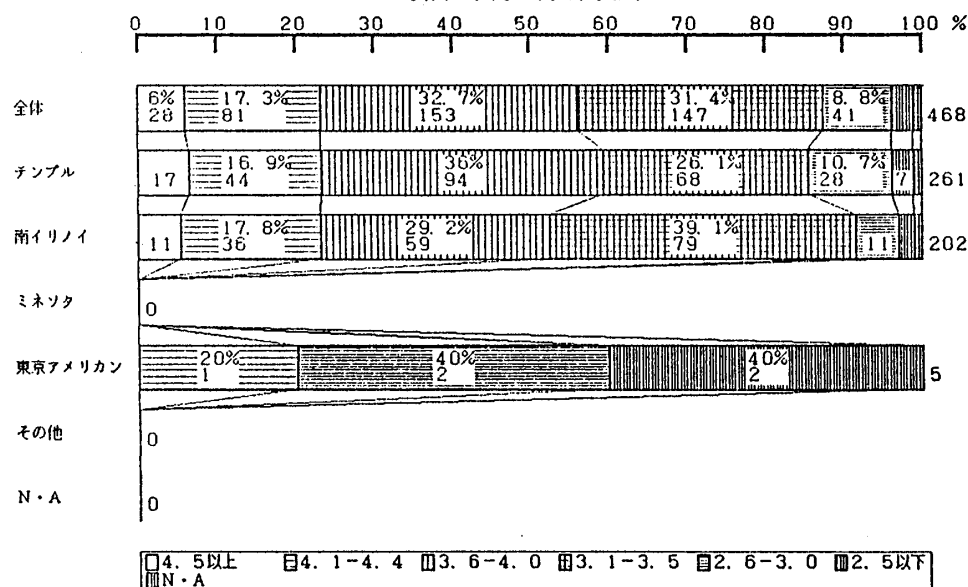


*単数回答。よって全体数が 243でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

高校時代の成績平均値は 5 段階中3.1～4.5が468人中381人（81.4%）である。

高校時代の成績平均値について尋ねたところ、3.1～3.5が147人（31.4%）、3.6～4.0が153人（32.7%）で全体の3.6～4.0が153人（32.7%）、4.1～4.4が81人（17.3%）で全体の約 8 割を占めている。ちなみに、4.5以上は28人（6.0%）である。

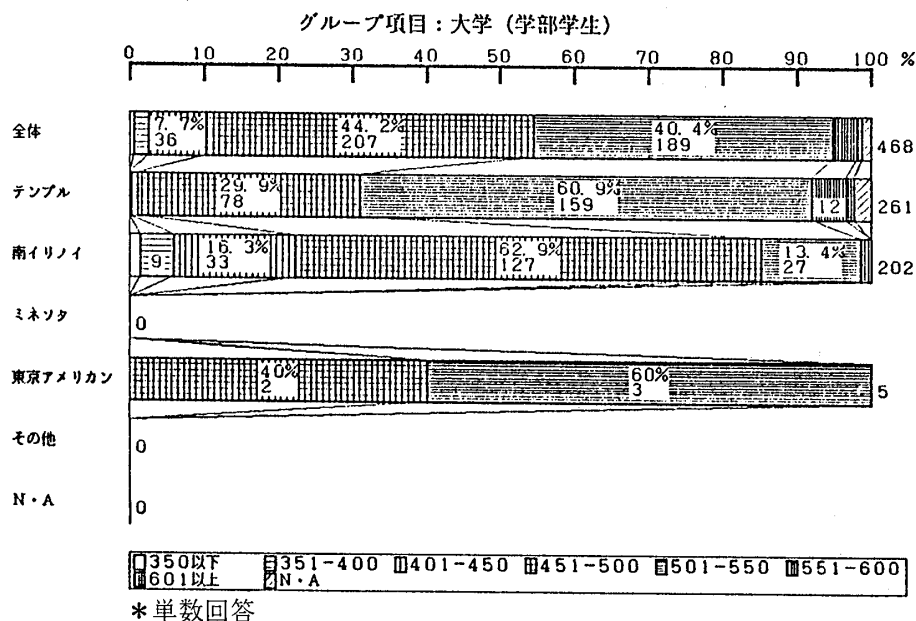
グループ項目：大学（学部学生）



*単数回答

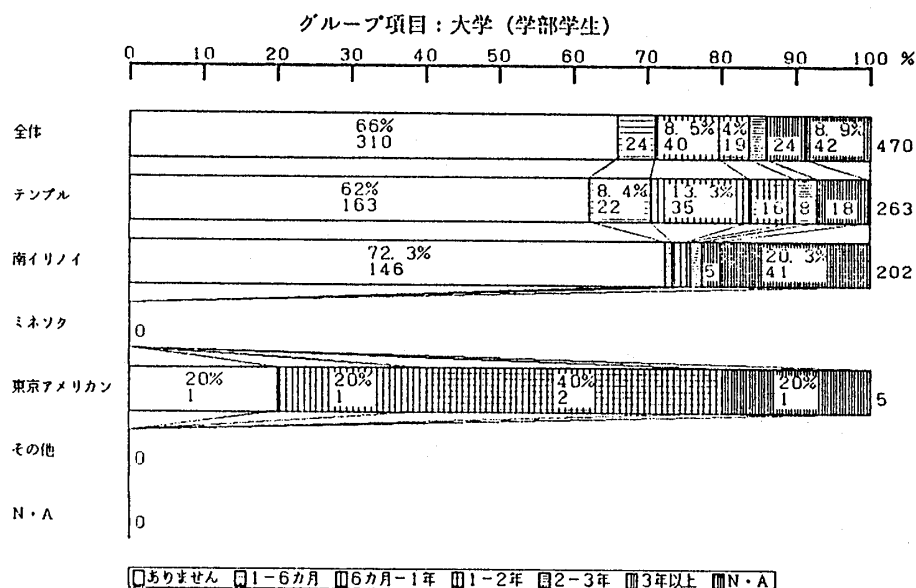
最近のTOEFLの得点は？ 約8割が450点以上である。

最近のTOEFLの得点について尋ねたところ、451～500が207人（44.2%）、501～550人が189人（40.4%）で全体の約8割りを占め、450以下が48人（10.2%）、551以上は18人（3.8%）であった。サザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校の場合、同課程の1～2年生を含んでおり、また、テンプル大学日本校の場合、同課程の1～4年生を含んでおり、結果として、TOEFL得点の英語学習経験効果による2校間格差が生じている。また、テンプル大学日本校の場合、TOEFL500点を入学基準とした学部直接入学の制度が実際に行われており、そういった結果が統計に現れている。



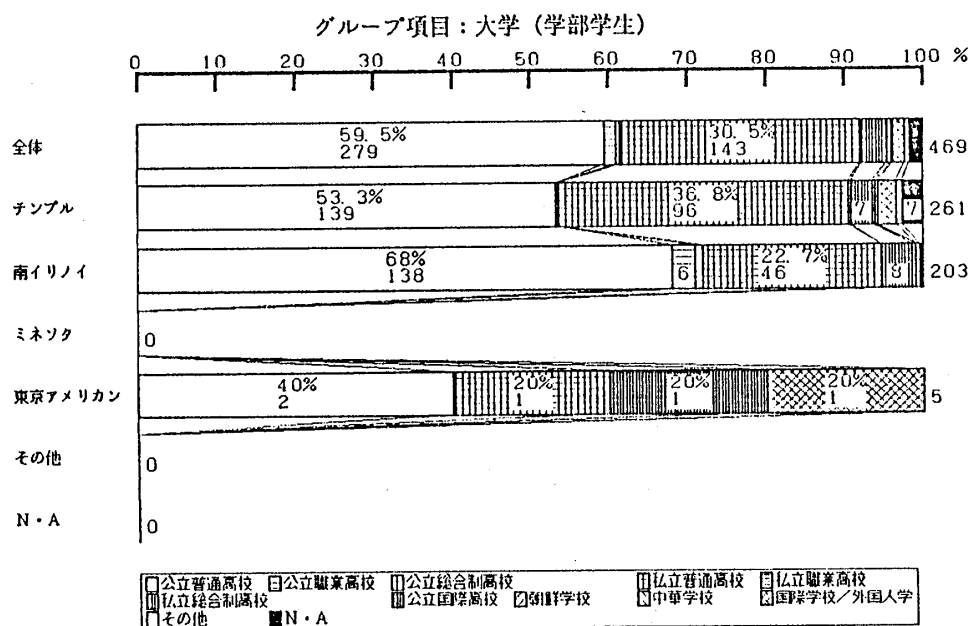
約3割が海外学校経験あり。

海外での学校経験の有無に関しては、全体の3割（468人中158人、33.7%）が「あり」と回答している。学校経験者形態（長期、短期）様々であるがその半数が高校留学である。



普通高校出身者が全体の9割を占めている。

出身高校について尋ねたところ、全体の90.2% (422人) が普通高校 (公立59.6%、私立30.6%) 出身である。学校教育法一条校外の学校出身は、全体の2.1% (10人) である。

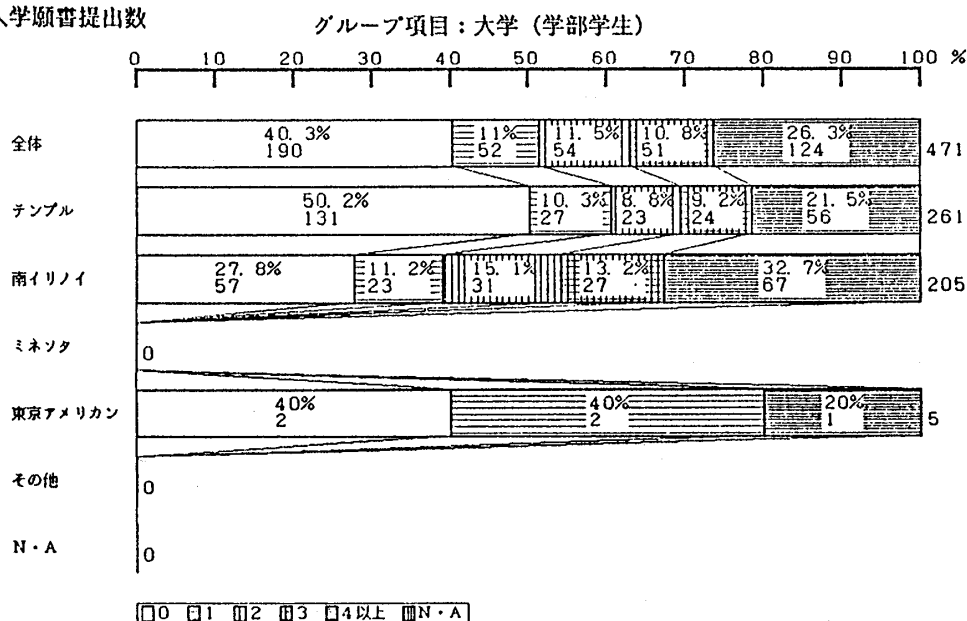


*単数回答。よって全体数が 243 でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

468人中281人 (60.0%) が日本の大学の少なくとも1校以上に入学願書を提出している。124人 (44.1%) が4校以上に入学願書を提出。そのうち、98人 (34.0%) が少なくとも1校から入学許可を得ている。

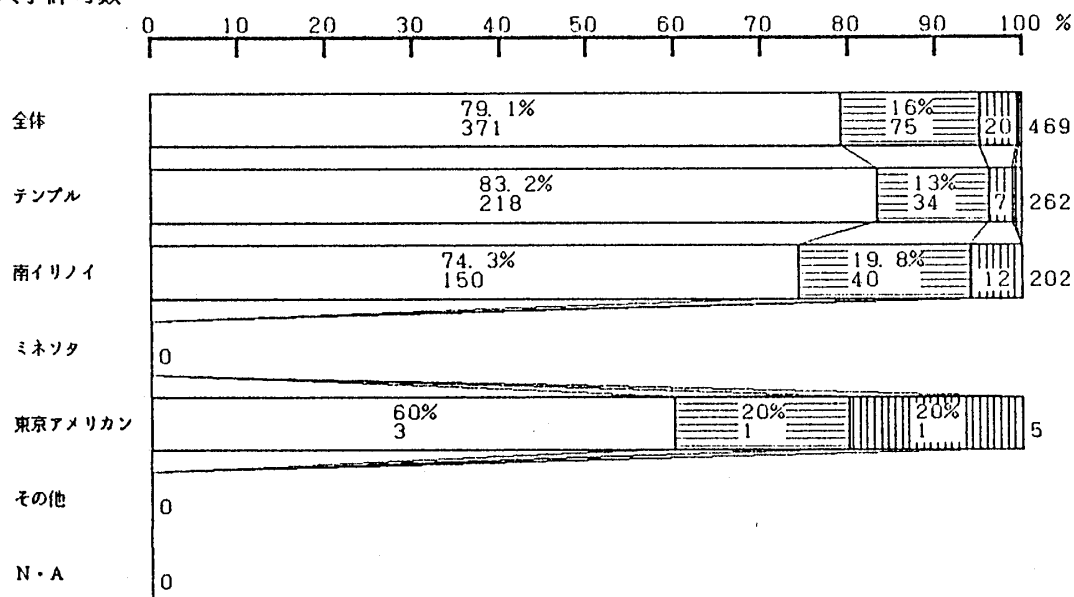
日本大学への提出状況について尋ねたところ、468人中281人 (60.0%) が日本の大学の少なくとも1校以上に、そのうち、4校以上に出席と回答した学生の124人 (44.1%) いる。入学願書の有無については、98人 (34.0%) が少なくとも1校から入学許可を得たと回答している。

入学願書提出数



*単数回答。よって全体数が 243 でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

入学許可数



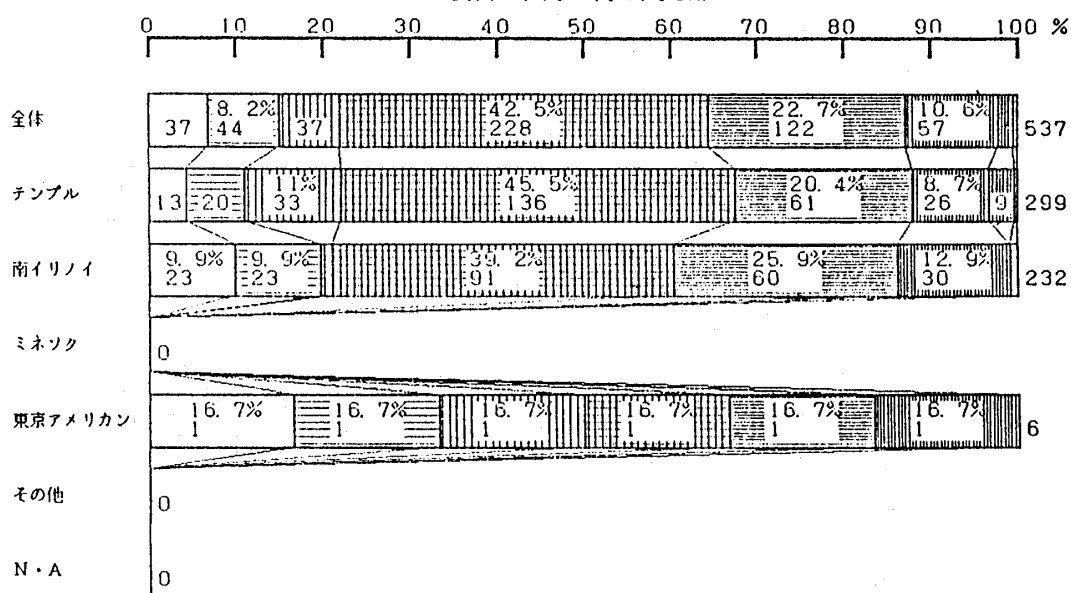
□0 □1 □2 □3 □4以上 □N・A

*単数回答。よって全体数が 243 でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

将来、得たい学歴・資格は？ 学士号228人 (48.7%)、修士号122人 (26.1%)、博士号57人 (12.2%)、職業資格44人 (9.4%)、の順となっている。

将来、得たい学歴・資格について尋ねたところ、全体468人中、学士号228人 (48.7%)、修士号122人 (26.1%)、博士号57人 (12.2%)、職業資格44人 (9.4%) の順になっており、高学歴指向が顕著である。

グループ項目：大学（学部学生）



□特になし □職業資格 □短大卒 □学士号 □修士号 □博士号 □その他 □N・A

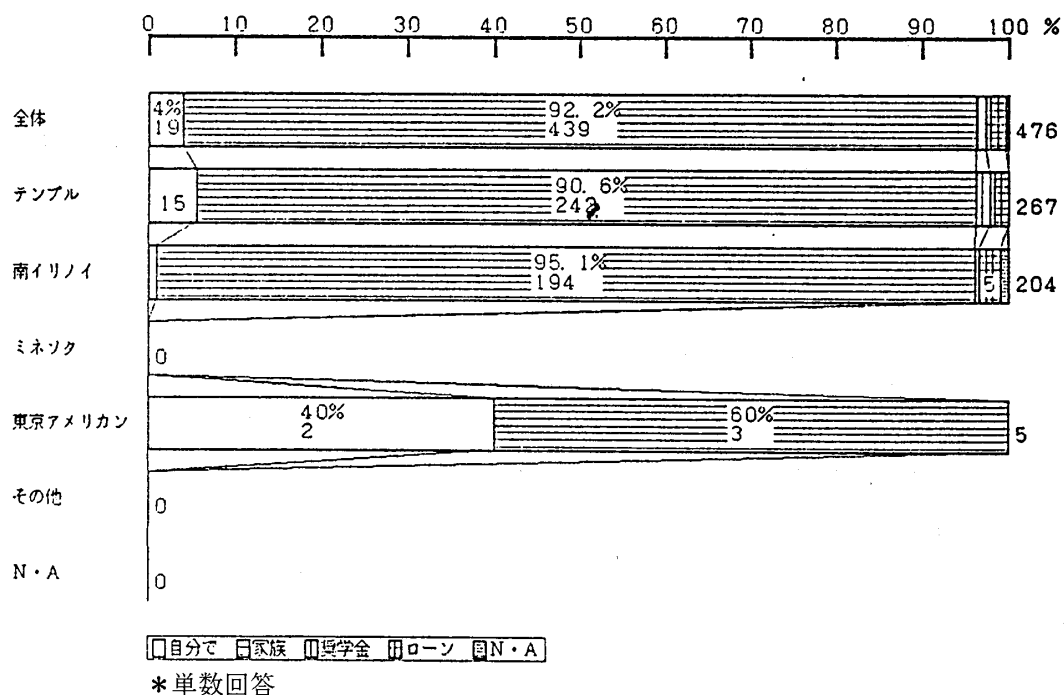
*単数回答

学費は家族が全面的に援助が9割以上。しかし、7割が継続的な援助に不安。

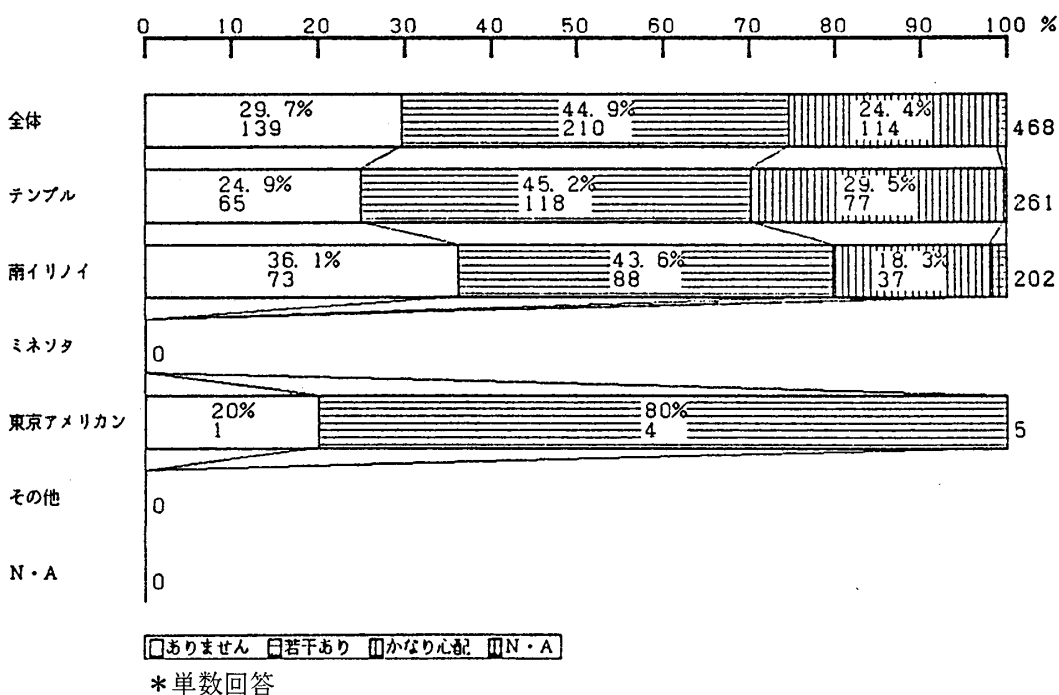
学費の納入について、468人中439人（93.8%）が家族の援助で圧倒的多数をしめている。しかし、将来（本校での学生生活を含む）継続的な援助には324人（69.2%）が何らかの不安を感じていると回答している。

学費はどのように

グループ項目：大学（学部学生）

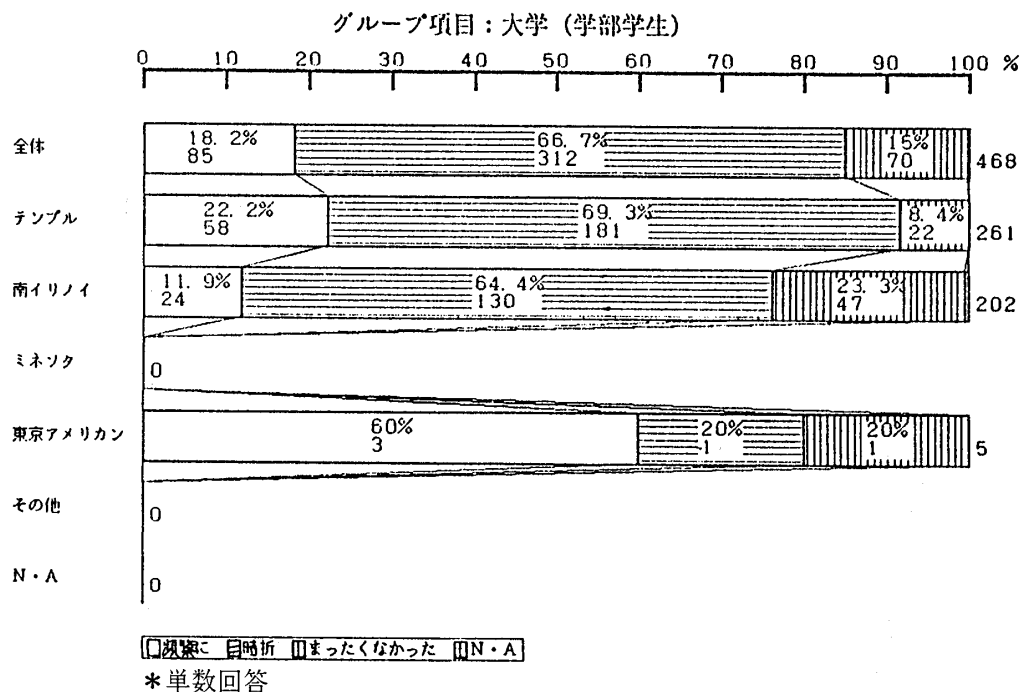


授業料の継続的支払の不安



授業終了後に英語を話しますか？ 時折66.7%、頻繁に18.2%、まったくない15.0%。

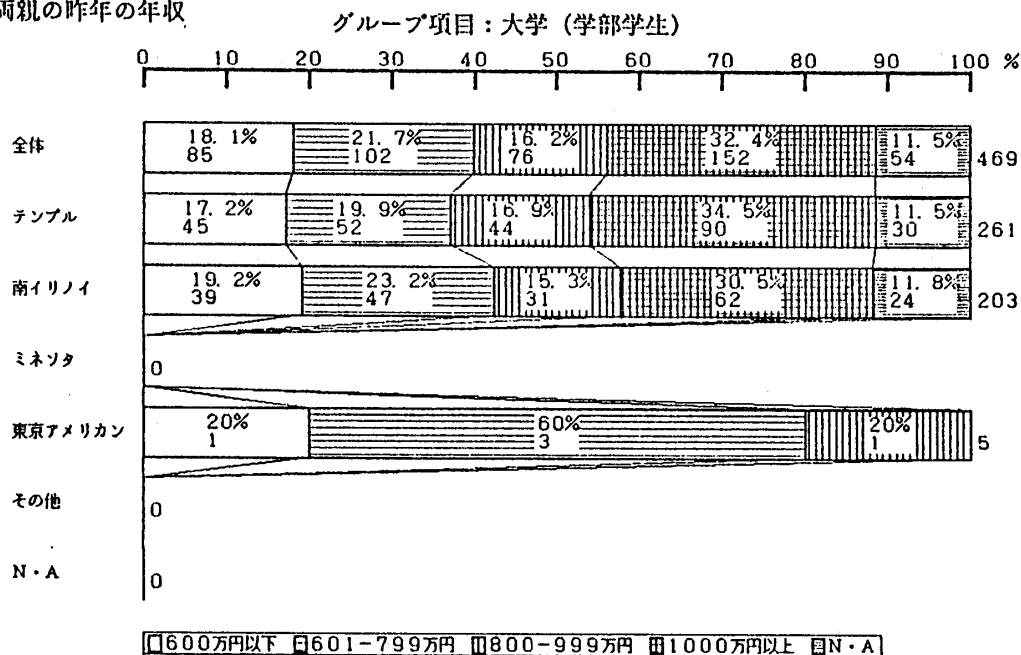
授業終了後の英語での生活について尋ねたところ、468人中312人（66.7%）が「時折」、85人（18.2%）が「頻繁に」、70人（15.0%）が「まったくない」と回答している。



家庭の年収は？ 1000万円以上が32.5%、800～999万円16.2%で、約5割が800万円以上。

家庭の年収について尋ねたところ、1000万円以上が468人中152人（32.5%）、800～999万円が76人（16.2%）、601～799万円102人（21.8%）、600万円以下85人（18.2%）となっている。

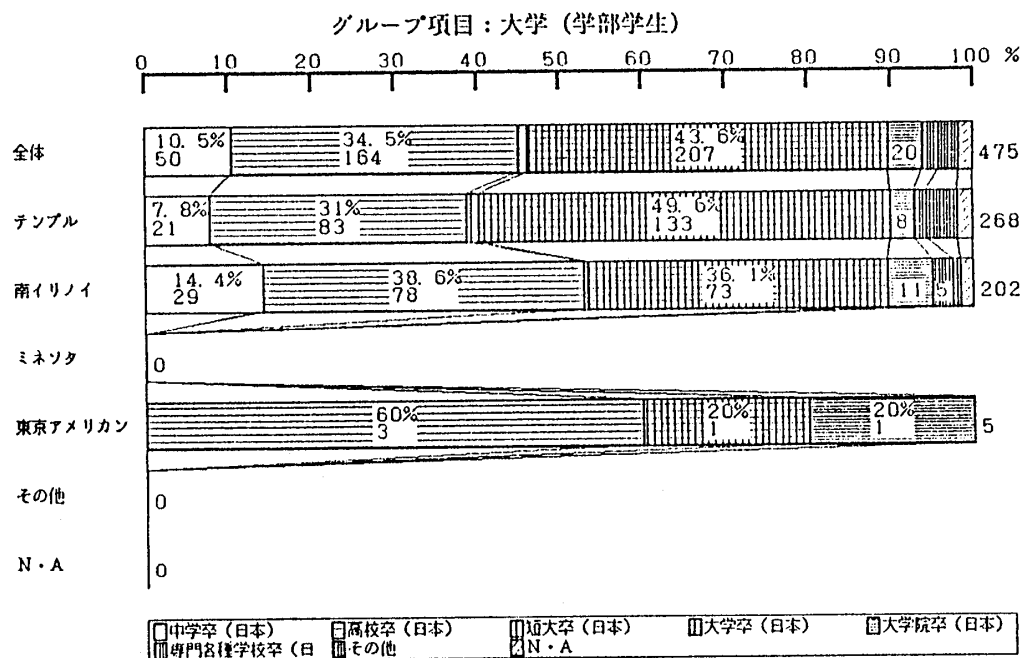
両親の昨年の年収



*単数回答。よって全体数が243でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

父親の学歴は？ 大卒44.2%、高卒35.0%。

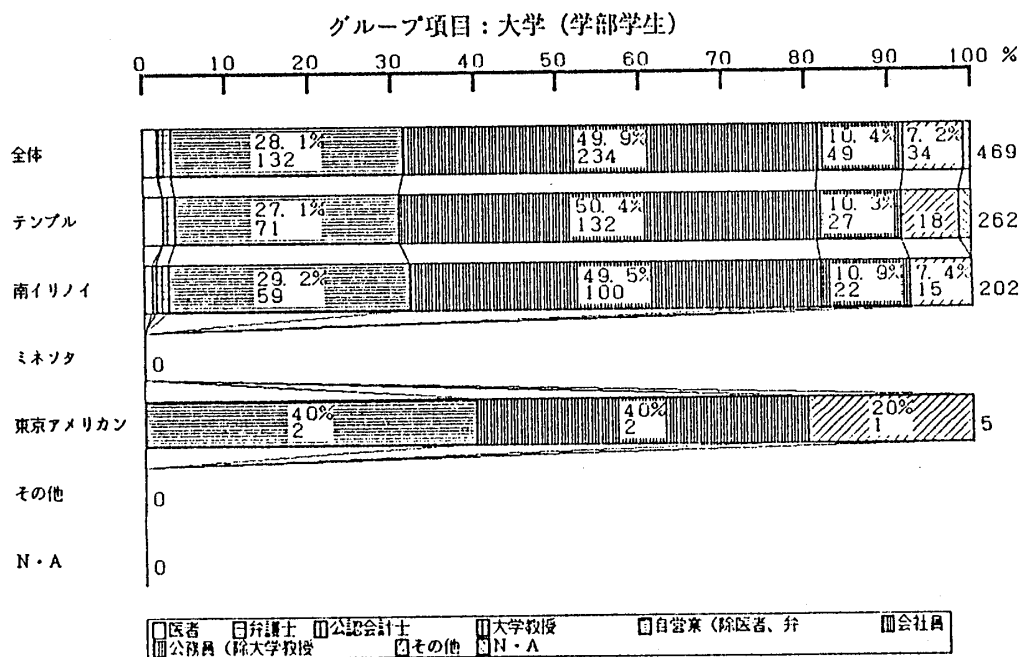
父親の学歴について尋ねたところ、468人中大卒207人（44.2%）、高卒164人（35.0%）、中卒50人（10.7%）、大学院卒20人（4.3%）の順となっている。



* 単数回答。よって全体数が 243 でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

父親の職業は、会社員50.0%、自営業28.2%。

父親の職業について尋ねたところ、468人中会社員234人（50.0%）、自営業132人（28.2%）の順となっている。



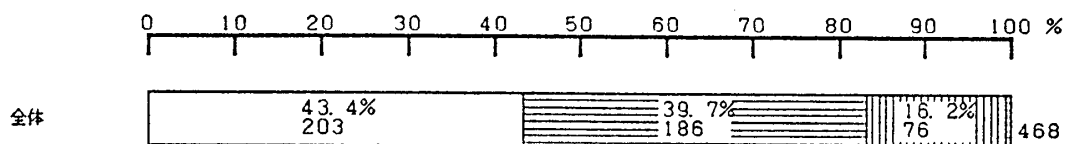
* 単数回答。よって全体数が 243 でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

彼らの両親評は？知的好奇心が旺盛で、教育熱心で、国際政治・経済にも関心が深く、かつ子どもの将来の職業にも関心を抱いているが、必ずしも日本の大学に大きな不満があったり、アメリカの大学教育をよく知っているわけではない。

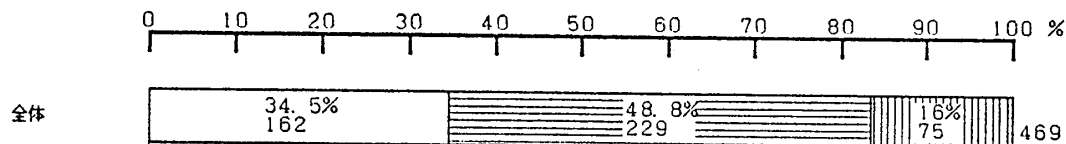
彼らの両親像について尋ねたところ、知的好奇心が旺盛、教育熱心、国際政治・経済への関心、子どもの将来の職業への強い関心といったことに約8割が賛意を示している。一方、日本の大学教育への強い不満とか、アメリカ大学の教育に対する深い理解、となると必ずしもそのようではないと回答している。

両親は：知的好奇心旺盛

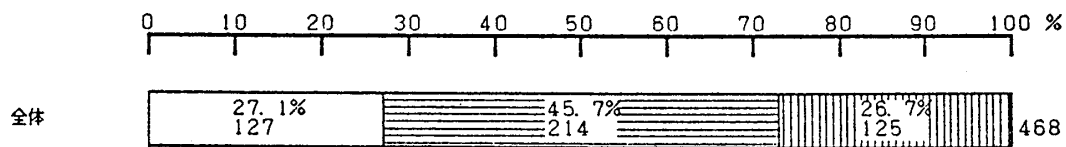
グループ項目：大学（学部学生）



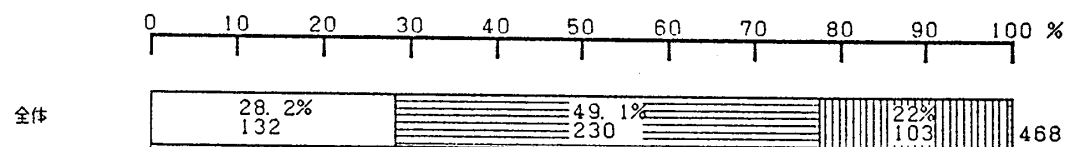
両親は：教育熱心



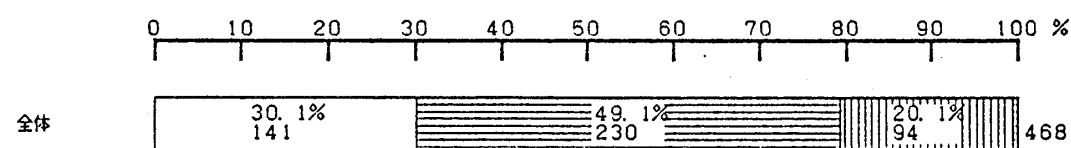
両親は：国際経済に強い関心



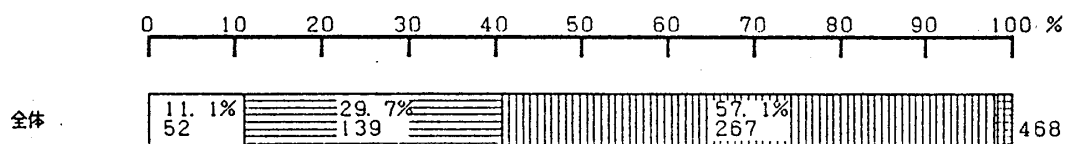
両親は：国際政治に強い関心



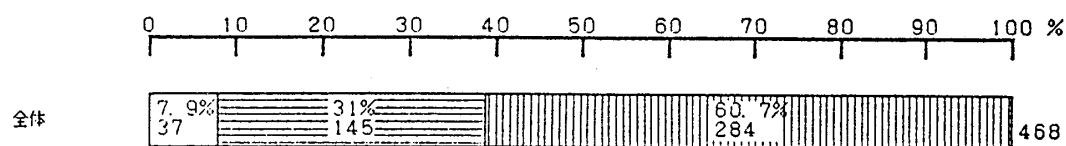
両親は：子どもの将来の職業



両親は：日本の大学教育に不



両親は：米国の大学教育をよ



□非常にそう思う ▨そう思う ▩そう思わない

*単数回答。よって全体数が 243 でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている項目がある。

進学理由でもっとも顕著なものは、英語の習得(93.6%)、教養を深めるため(93.6%)、興味関心のある事象についていっそうよく知るため、(92.5%)、学習技術を向上させるため(85.1%)となっている。

進学理由を尋ねたところ、英語の習得が468人中438人(93.6%)、教養を深めるため438人(93.6%)、興味関心のある事象についていっそうよく知るため433人(92.5%)といった項目が極めて高い賛意値を示している。一方、よりよい職業に就くためとか、より多くの収入を得るためとかは、60~70%の賛意値を示しているものの案外低い値となっている。

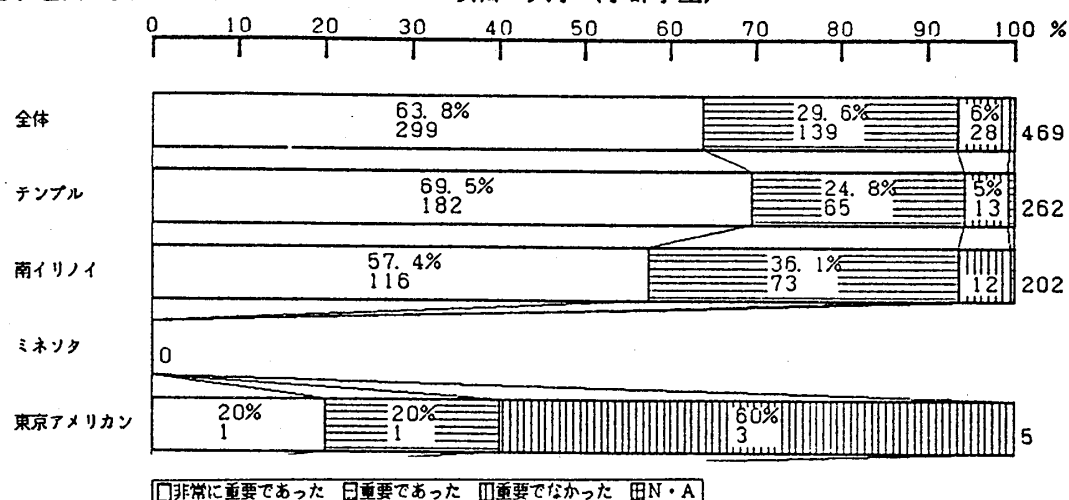
その他、

1. 他大学にない特別教育プログラム(70.3%)
2. 海外で仕事がしたい(68.6%)
3. 直接留学へ不安(67.5%)
4. 英語教育プログラムの質(65.4%)
5. アメリカ大学生活への憧れ(61.9%)
6. 希望の職に就職が有利(58.5%)
7. とにかくアメリカに行きたかった(54.5%)
8. 本校のすばらしい教育の評判(50.0%)
9. すばらしい教育の評判(49.6%)
10. 当大学の使命に感動(41.0%)
11. 浪人を避ける(40.0%)
12. 自宅からの通学圏内(40.0%)
13. 立地条件(38.2%)
14. 両親の薦め(29.5%)
15. 高校教員の薦め(14.1%)
16. 授業料が安い(11.5%)

となっている。

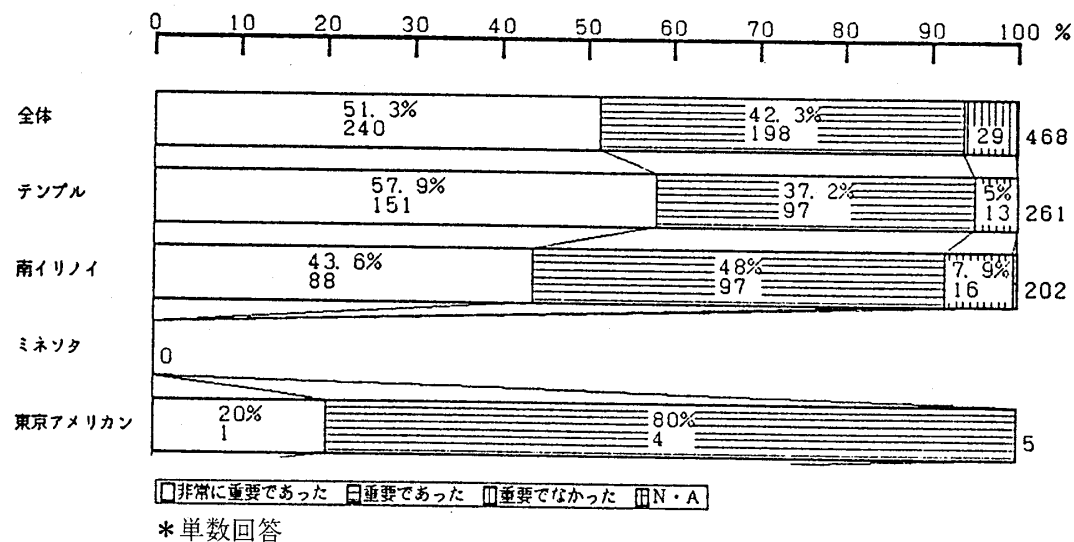
進学理由：英語の習得

グループ項目：大学(学部学生)

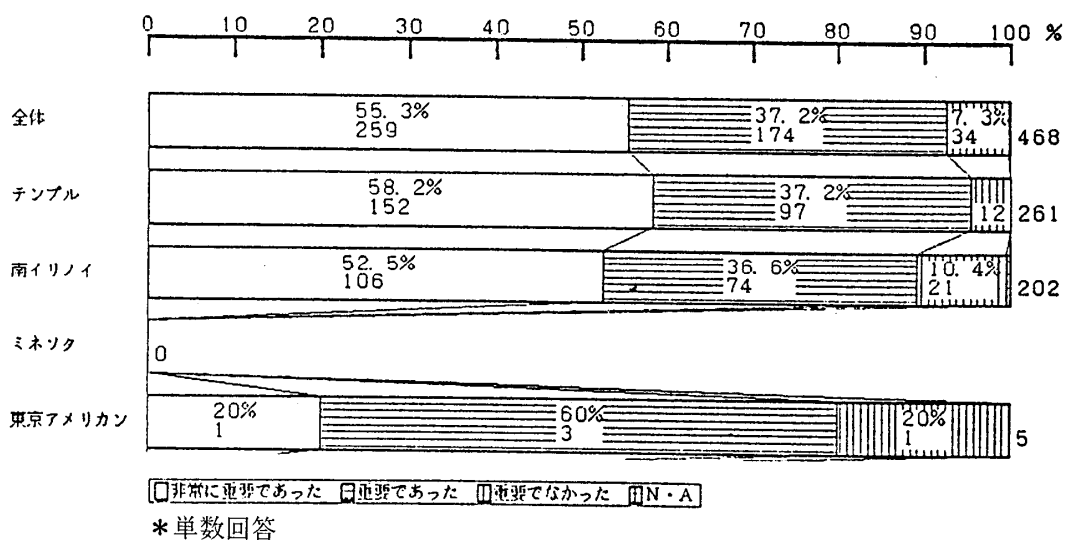


*単数回答。よって全体数が243でなければならないが、集計時に発見された若干の複数回答を無効としなかった為に結果として全体数が若干増えたかたちになっている。

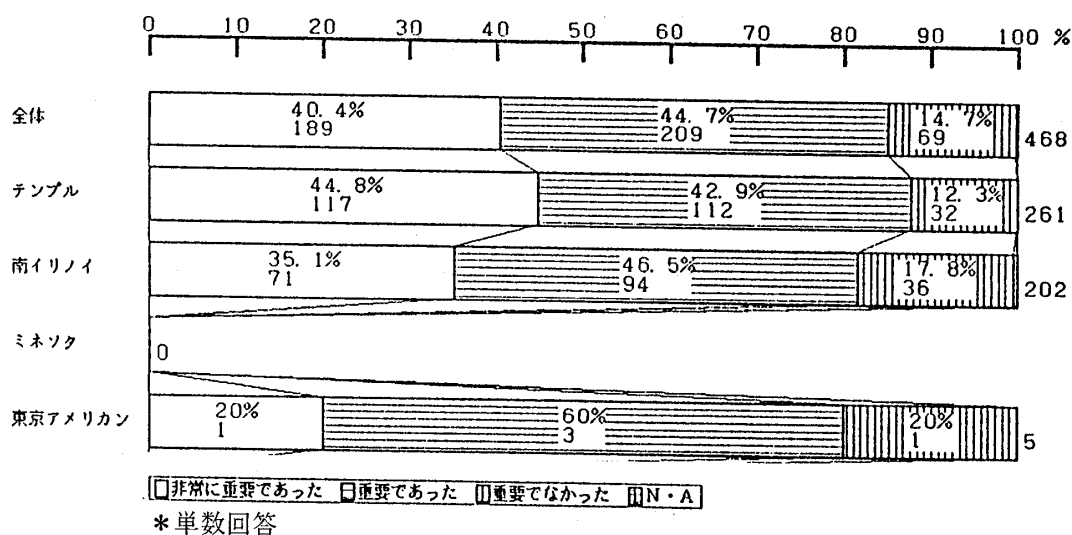
進学理由：教養を深めるため



進学理由：興味のあること

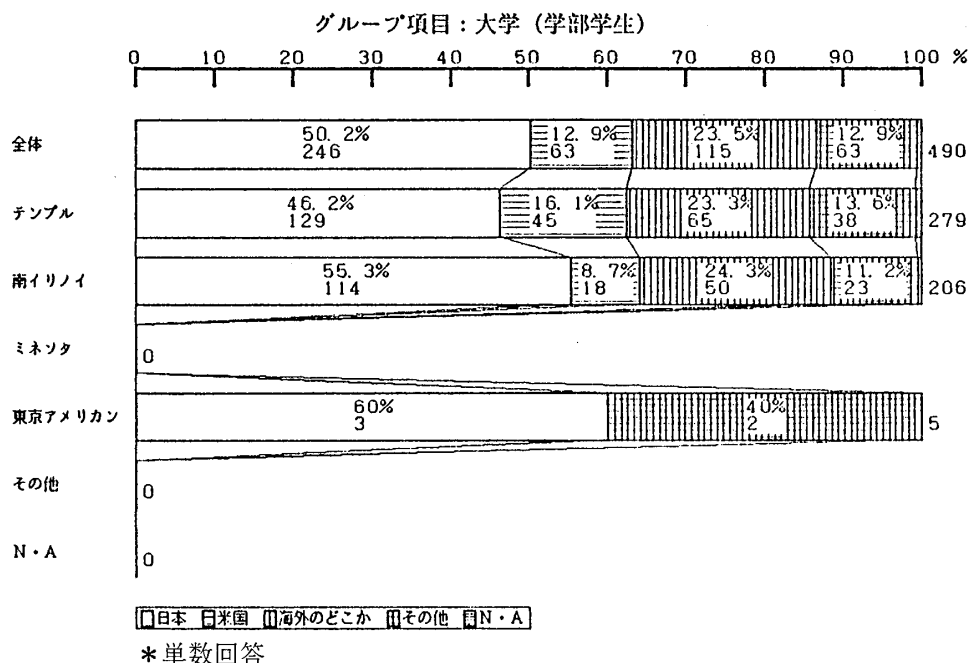


進学理由：学習技術を向上



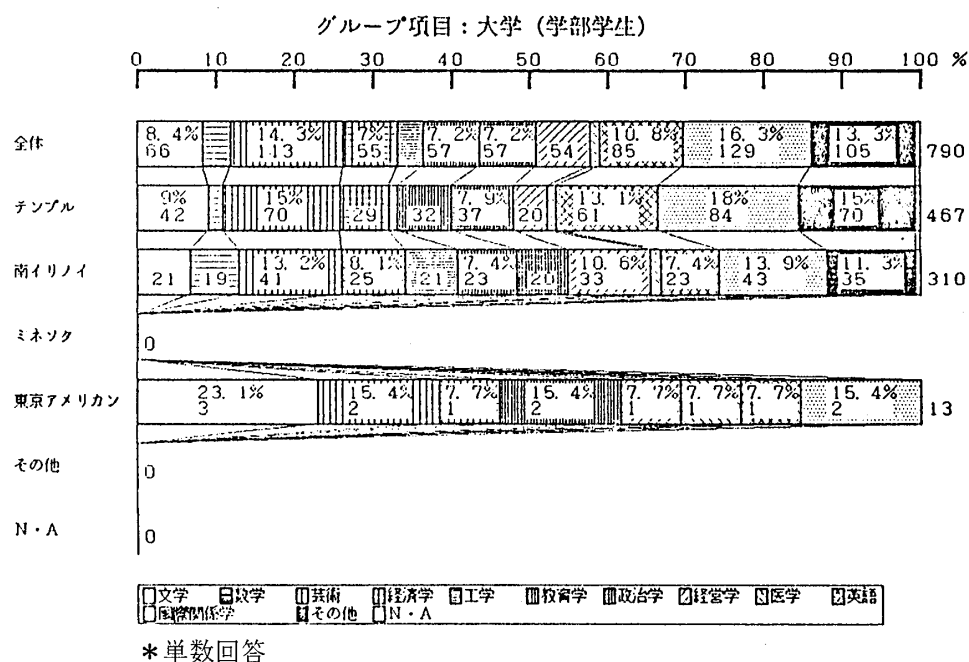
将来、日本で仕事をしたい学生が約半数である。

将来、どこで働きたいかという質問に対し、468人中178人（38.0%）がアメリカを含む海外で、246人（52.6%）が日本と回答している。



学問分野への関心？国際関係学（27.6%）、芸術（24.1%）、英語（18.2%）、教育学（12.2%）、経済学（11.8%）、経営学（11.5%）の順となっている。

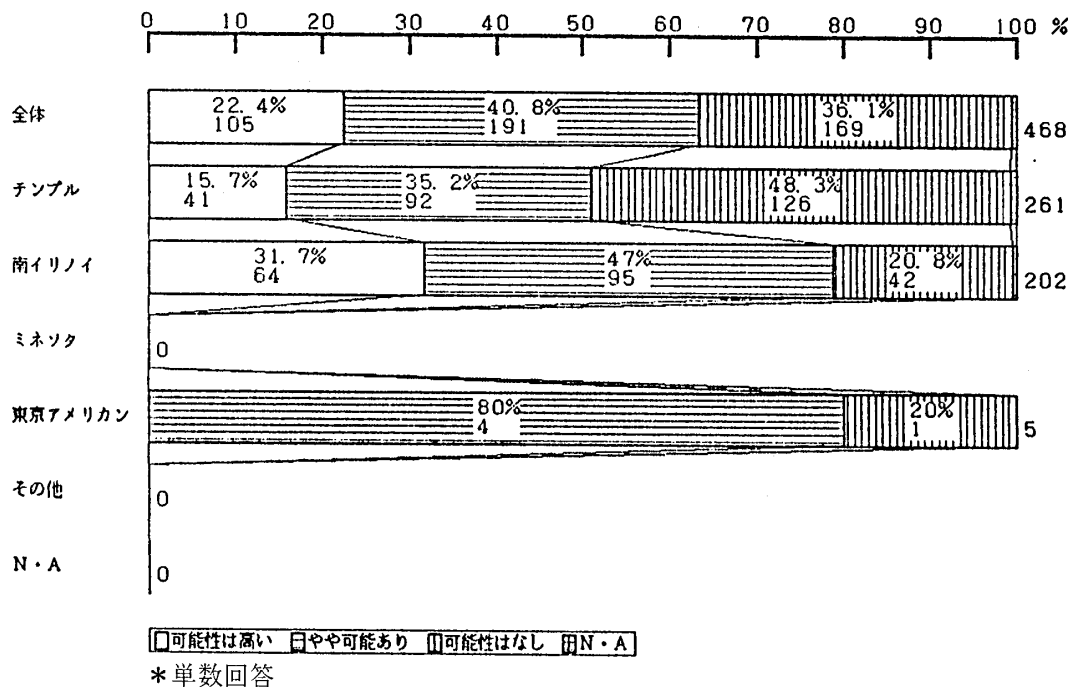
学問分野への興味関心について、国際関係学が468人中129人（27.6%）と高い人気を示している。また、経済学・経営学もともにビジネスへの興味関心と判断すれば、109人（23.2%）となるがそれでも国際関係学を下回る。その他、芸術113人（24.1%）、英語85人（18.2%）、教育学57人（12.2%）となっている。



約6割の学生がこの学期中に1科目以上の単位を落としそうだという回答をしている。

この学期の学習状況を尋ねたところ、468人中296人（63.2%）の学生が1科目以上の単位を落としそうだと回答している。

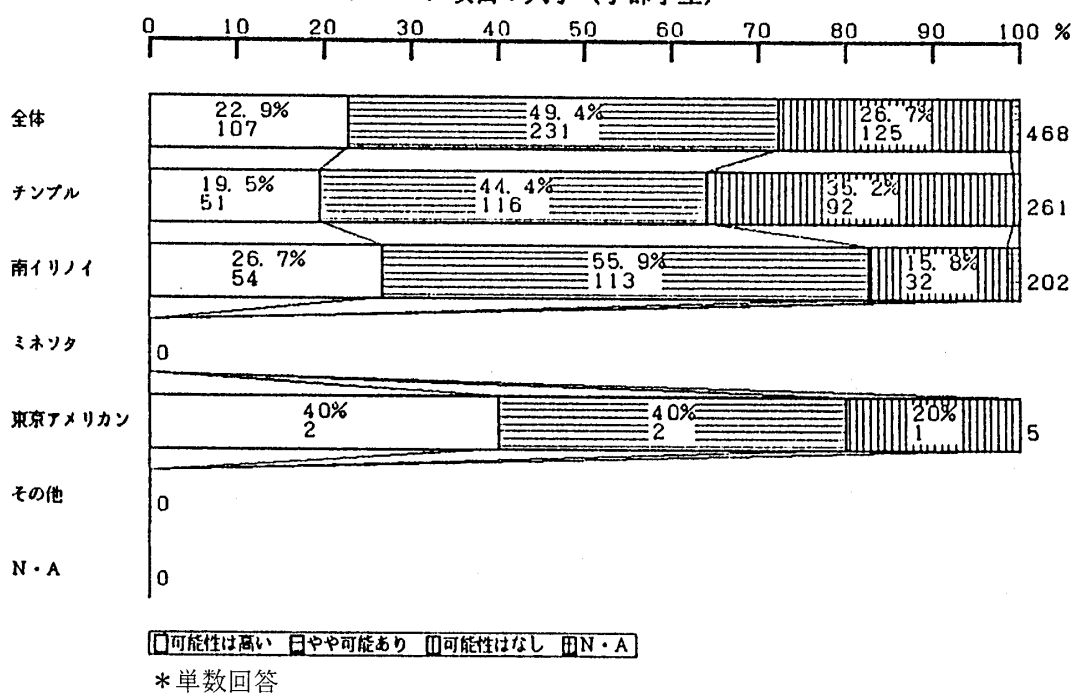
予測：一科目以上単位を落と グループ項目：大学（学部学生）



卒業が予定より延びそうだという学生が約7割。

卒業予定について尋ねたところ468人中338人（72.2%）の学生が予定が延びそうであると回答している。

予測：卒業が予定が伸びる グループ項目：大学（学部学生）

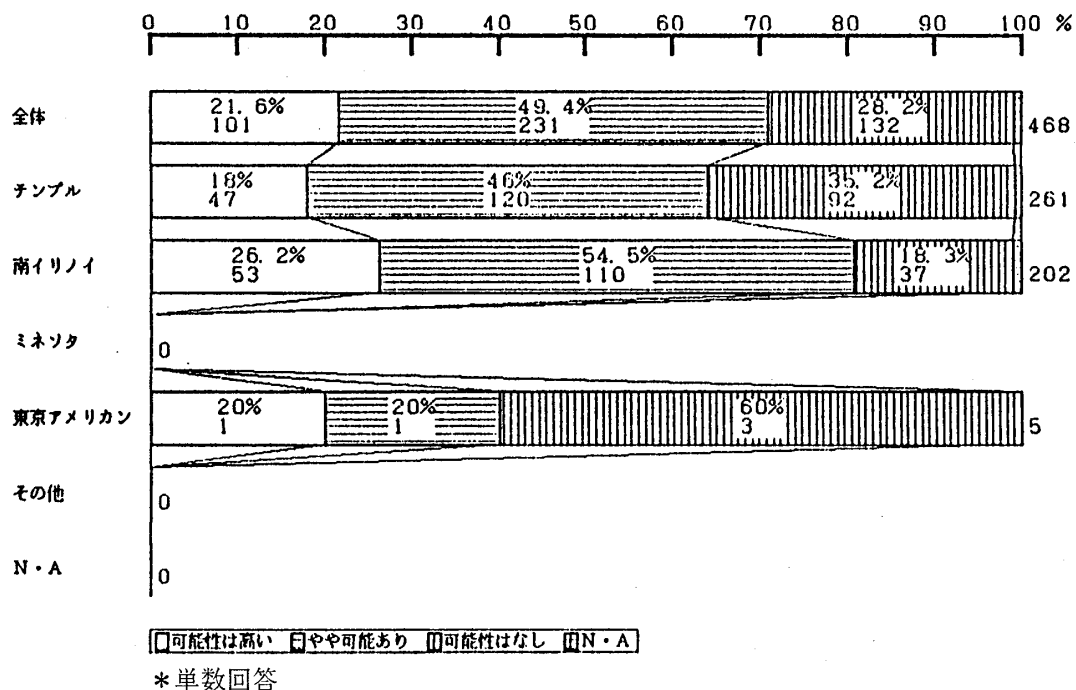


7割以上の学生が今後TUTORを必要とするかもしれないと回答している。

TUTORの必要性について尋ねたところ、468人中332人(71.0%)がTUTORを必要とする可能性があるとは回答している。

予測：tutorが必要

グループ項目：大学(学部学生)

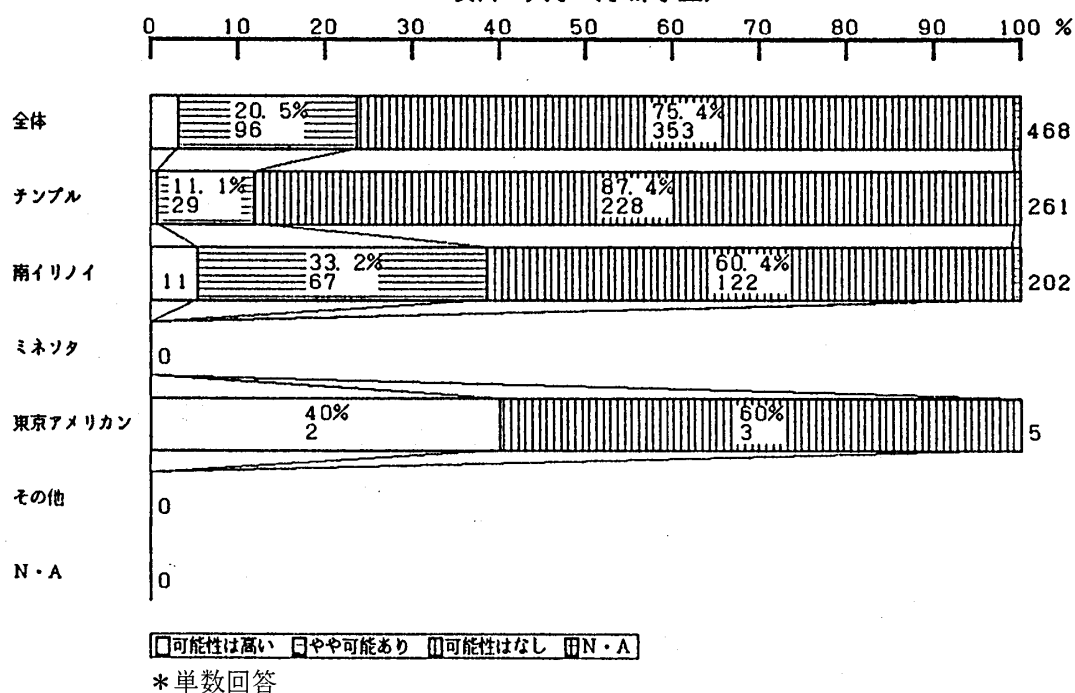


約2割の学生が落第し、中退する可能性のあることを示唆している。

落第、中退の可能性を尋ねたところ、468人中111人(23.7%)がその可能性があるとは回答している。

予測：落第し、中退する

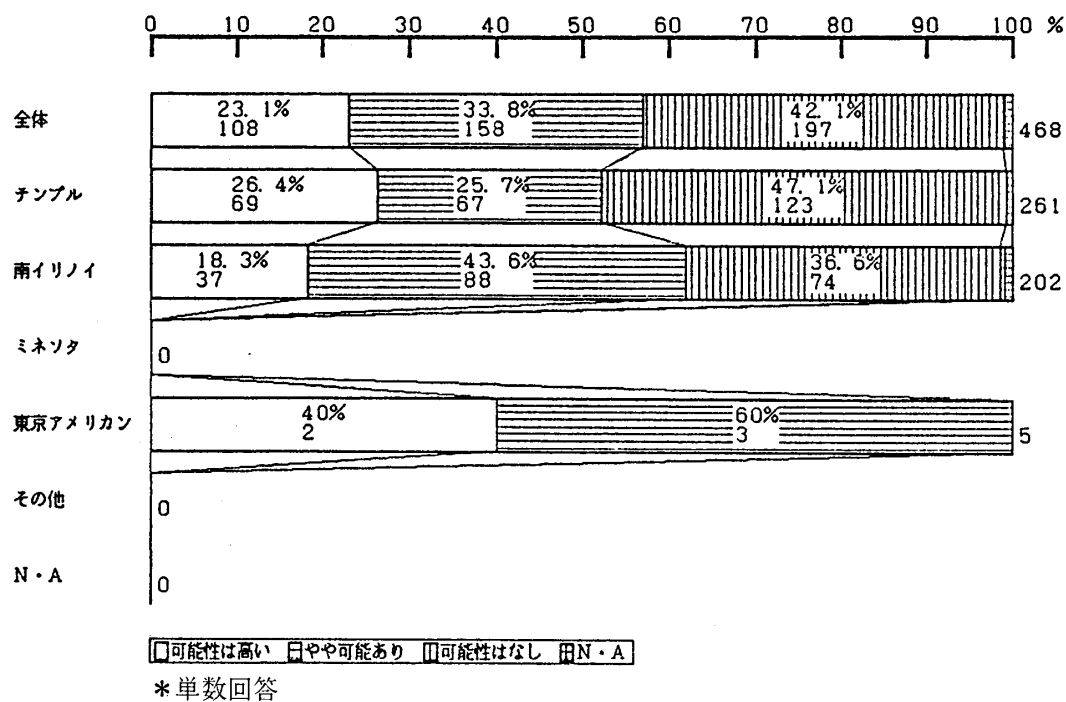
グループ項目：大学(学部学生)



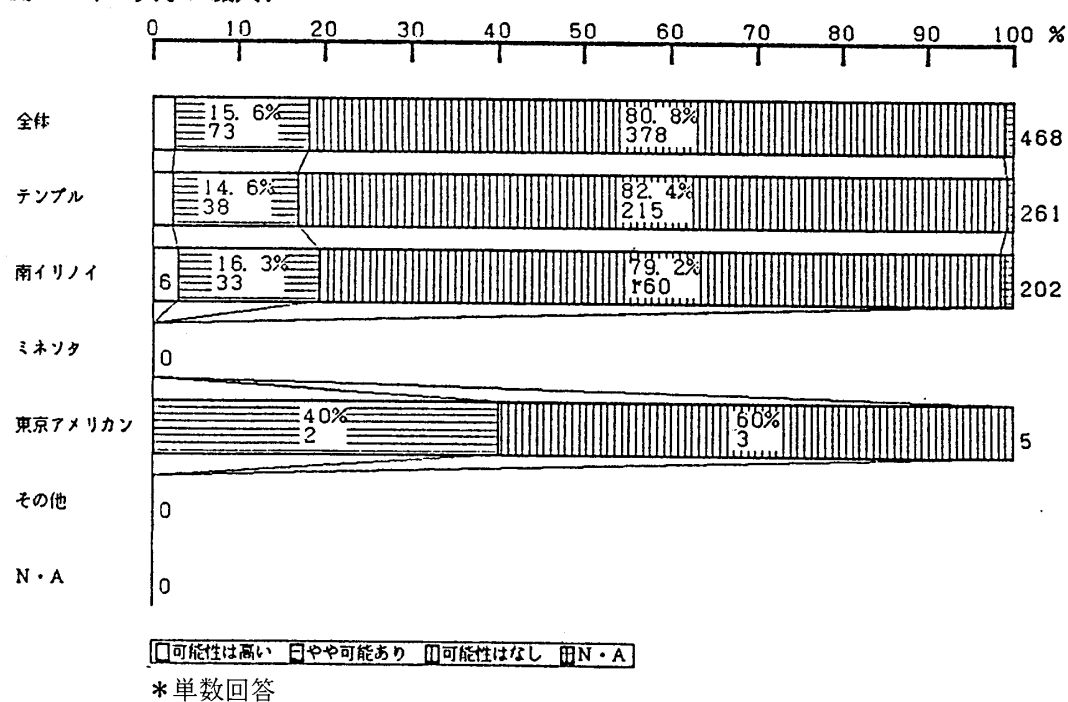
他のアメリカ大学への編入の可能性をほのめかしている学生が約6割。

他のアメリカ大学への編入の可能性を468人中266人(56.8%)がほのめかしている。ちなみに、日本の大学への編入については、378人(80.8%)がその可能性はないと回答している。

予測：他の米国大学に編入す グループ項目：大学(学部学生)



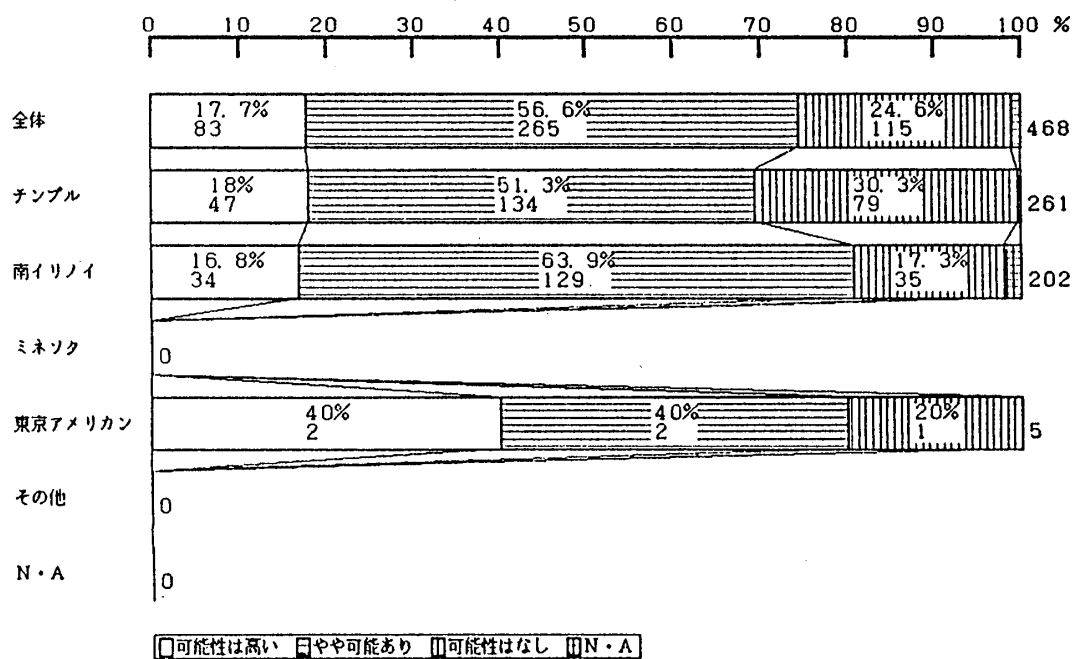
予測：日本の大学に編入、



最終的にこの大学生活に満足しないと思うという学生が約2.5割。

学生生活終了後の結果としての満足度について尋ねたところ、「満足しないだろう」と回答した学生が約1／4の115人（24.6%）いる。「満足しない可能性がややある」と回答した学生が265人（56.6%）、「満足する」と回答した学生が83人（17.7%）となっている。

予測：学生生活に満足する グループ項目：大学（学部学生）



* 単数回答

4. まとめ

調査を終えて、これまで様々な形容されてきたアメリカ大学日本校の学生のプロフィールが明確に浮かび上がってくる。

- 1) 集中英語課程では19～20歳が、学部課程では20～22歳が8割を占め、伝統型学生がほとんどである。23歳以上が2割で、非伝統型学生は少数派である。就学形態においても、フル・タイム就学が圧倒的でパート・タイム就学は極めて少ない。
- 2) 集中英語課程では7対3で男性が多いが、学部課程では4対6と女性が多くなっている。2つの理由が考えられる。集中英語課程を終えて学部課程に進学できたのは女子学生が多い、あるいは、例えば、テンプル大学のようにTOEFL選考による学部課程直接入学制度が実際に機能しているところの場合など、女性入学者数が男性入学者を上回っているといった理由である。

- 3) テンプル大学日本校や東京アメリカン・コミュニティ・カレッジなど東京都心に立地しているところでは、自宅通学者が多いが、自治体誘致による地方に立地しているところでは、県外出身者が半数以上を占め、彼らの多くが寄宿舎生活をしている。
- 4) 高校時代の成績は、大半の学生が3.1～4.0（5段階評価）であり、この学生層は、我が国の大学入試における推薦入試の対象からは外れるが、大学入学希望者群には含まれる層である。
- 5) T O E F Lの得点から推測すると、日本校（4校）の集中英語課程から学部課程への移籍基準は450点である。特に、学部課程のT O E F Lの得点に学校間格差が生じているが、これはテンプル大学日本校の学生は1～4年生を含んでいるが、サザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校は1～2年生しか含まれていない、といった事情がある。それは、ミネソタ州立大学機構秋田校の集中英語課程の学生のT O E F Lの得点の平均がサザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校の集中英語課程の学生の得点の平均よりも低いという結果になっている。これも、サザン・イリノイ・ユニバーシティ・カーボンデール・新潟校が1～2年の集中英語課程の学生を含んでいるのに対して、ミネソタ州立大学機構秋田校の集中英語課程は開校1年未満のために1年生しかいないといった事情を含んでいるからである。いずれにしても、在籍年数とT O E F Lの得点とは相関関係にあるようである。
- 6) 長期の海外学校の経験を持たない学生が大半である。特に、集中英語課程の学生においては、持たない学生が顕著に多い。学部課程においては、若干の増加が一部の学校においてみられる。テンプル大学日本校と東京アメリカン・コミュニティ・カレッジである。東京アメリカン・コミュニティ・カレッジはサンプル数が少ないので、全体比率に与える影響は少ないが、テンプル大学日本校の場合、大きな影響を与えており、全体として、経験を持つ学生比率を高めている。学部直接入学制度の結果、既にT O E F Lで500点以上とっている学生が入学してきており、彼らの多くが海外学校経験（国際学校の卒業生も含む）を持っているからであろう。
- 7) 普通高校の出身者が大半を占めている。
- 8) 集中英語課程および学部課程において、アメリカ大学日本校だけでなく、日本の大学も受験した学生が約6～7割おり、約3割が少なくとも1校から合格通知が届いたと答えている。アメリカ大学日本校が、我が国の多くの高校生にとってオルタナティブな進学対象高等教育機関となりつつあることを示している。
- 9) 極めて高学歴指向にあり、博士号取得希望者が集中英語課程で14.6%、学部課程で12.2%いる。我が国の大学生の学歴意識は顕著に異なっている。おそらく、入学前オリエンテ

ーション、入学後のオリエンテーションの成果であり、アメリカの高等教育制度の利点を積極的にアピールした結果であろう。

- 10) 学費は家族が全面的に援助しているが、今後の勉学の進度によって、卒業まで何年かかるか明確に自己規定することができず、不安に思い始めた層が約7割いる。集中英語課程では学部課程移籍への不安、学部課程では卒業に対する不安といった具合に不安に起因する緊張が序々に高まっており、TUTORの必要生とか、単位を落とす可能性とかいったところで表面化してきている。
- 11) 家庭は相対的に裕福であり、全体の約半数が年収800万円以上であると回答してきている。また、自営業の家庭が約3割であり、子どもの将来の職業を見据えた選択がどのようなおこなわれたか興味深い。更に、両親が日本の大学教育にさほど不満を持っているわけではなく、同時にアメリカの大学教育をよく知っているわけでもないといった背景においての、子どものアメリカ大学日本校への進学の実行がなされたことも極めて興味深いことである。
- 12) 進学理由で最も顕著なものは、「英語の習得」が集中英語課程および学部課程ともトップに上げられており、語学習得への関心の高さを裏付けている。尚、両課程ともに言えるが、授業料の高さが社会的には指摘されていながらも、ここでは関心が極めて低いのは、家庭の経済状況を反映しているのかもしれない。
- 13) 将来海外で働きたいという学生は全体の半数に満たない。尚、集中英語課程の学生に対して学部課程の学生のほうが将来日本で働きたいという学生が多いのが興味深い。
- 14) 集中英語課程および学部課程において最終的にこの大学で満足しない。他の大学で更に勉強するといった学生が2割余りいることも興味深い。アメリカ大学におけるトランスファー制度に対するオリエンテーションの効果であろうか。